

# 我が古代史の旅

新たな真相解明に向かって  
(総集版)

堂本彰夫

2021年12月

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒[gakuyou17@outlook.jp](mailto:gakuyou17@outlook.jp)

## 目 次

- ① 何を、どうすれば、さらなる真相解明に至れるのか？横たわる、「三つの大きな山（謎の塊）」?! ..... 1
- ② まずは、最大（第二）の山（謎の塊）?!「（崇神～）応神（～継体～欽明）期」！ ..... 4
- ③ その最大（第二）の山（謎の塊）は、「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きと関連している?! ..... 7
- ④ 改めて、「応神（天皇）」を、「伽耶・新羅系勢力」と「百済・北方系（扶余系）勢力」の「合体（天皇）」としてみると、果たしてどうなるのか?! ..... 10
- ⑤ 「太宰府」は、「（九州）倭国」の首府であった?!「倭の五王」時代の真実?! ..... 13
- ⑥ 「物部氏」「葛城諸族（蘇我氏）」（筑紫倭国?）、そして、一方の「息長氏」「秦氏」（豊国倭国?）が、第三の山（謎の塊）をつくった?! ..... 16
- ⑦ 「葛城氏」と「息長氏」の近畿移動、しかもセットで?では、いつ頃、どのように? ..... 19
- ⑧ 次が、第一の山（謎の塊）?「邪馬台国（連合）」前後の「倭国（種）」の実態?!「安曇族」の全国展開（海洋交易）と「（倭）奴国」のその後?! ..... 22
- ⑨ 「安曇族」と「カモ（鴨/賀茂）族」の東方移動?!まずは、彼らが、「倭国→日本国」への契機（原形）をつくった?! ..... 25
- ⑩ 「吉備」で力を蓄え、「出雲」→「近畿／大和」に移動（進出）した「ワニ（和邇/和珥）族」と「カモ（鴨/賀茂）族」?! ..... 28

⑪ 「カモ（鴨/賀茂）族」と「ワニ（和邇/和珥）族」の関係及び、その出自?!	31
⑫ 改めて、「倭国大乱」は、全国規模で起こっていた?!	34
⑬ 「奴国」「伊都国」、そして「邪馬台国（連合）」の関係は?!	37
⑭ 改めて、「安曇族」とは何か?!そして、「隼人族」との関係は?	40
⑮ 「製銅・製鉄族（山の民→山つ霊→山祇 <sub>やまつみ</sub> ）」と「海人 <sub>あま</sub> 族（海の民→海つ霊→海神 <sub>わたつみ</sub> ）」の相剋と建国?!	43
⑯ 敢えて、「高天原神話」の構図?を描き出してみると?	46
⑰ そこに、「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国?）」の関係が投影されている?!	49
⑱ 歴史（「記紀」）を操作した（最初に創った?）のは、「息長氏」と「秦氏」?!	52
⑲ それを、集大成（改竄/剽窃?）したのが藤原氏（不比等）?!	55
⑳ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか?—その1—	58
㉑ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか?—その2—	61

① 何を、どうすれば、さらなる真相解明に至れるのか？横たわる、「三つの大きな山（謎の塊）」？！

とにかく、「私的 日本古代史考～建国の真相はいかにあったのか?!～」と題する、私の「古代史の旅」は、昨年、一応の終わりを遂げていた（「試作版」の作成）。だが、ほぼ？やり終えたという思いは、もちろんあったが、一方では、まだ十分な納得も得られず（新たな課題や疑問も感じられ始め、その壁の大きさに恐れをなしていた？）、この間、随分と「一休み」をしていた！ただし、その間、手持ちの本や資料の読み直しや他の情報も得ながら、新たなアプローチを考えていたことも事実であり、最近、その「修正試作版」を作成した次第でもある！

そこで、以下、ここでは、それを土台にして、「新たな真相解明に向かって」と題して、決意も新たに、次なる「旅」を目指すこととした?!それは、当然、さらなる史実？（解き明かしたい真相）の、単なる追加（上積み）を行うということではなく、標記のタイトルのような視点を論の基軸としながら、より精緻な考察をなしたいということである。そして、それは、まさしく今、鋭意準備を始めている「最終版」作成の、さらなる補強にしたいということである！

と言うのも、そうした論の基軸がないと、やはり？相変わらず情報の渦（密林？）に巻き込まれ（迷い込み？）、全体として何を明らかにしようとしているのかが分から（見え？）なくなってしまうからである?!否、重複や堂々巡りの方が、徐々に顕著となってきているということである?!

さらには、全体の意義も分からずに（分かってとせずに？）、他人の成果をつまみ食いしてきたという、ある種の申し訳なさ（恥ずかしさ？）が、徐々に頭を擡げてきているということでもある?!

その大きな原因（もちろん、最終的には、私自身の責任ではあるが！）は、端的に、「倭国近畿大和説（←邪馬台国畿内説）」と「倭国九州説（←邪馬台国九州説）」の無秩序（失礼ではあるが、無邪気？）な並走状態にあると思われるが、とは言っても、繰り返しになるが、そのことを超克するだけの説得材料も、交通整理能力もない私ではあるので（当然ではあるが！）、今はまだ、それに甘んじなければいけないのでもある！

いずれにしても、「記紀」によって創られたであろう建国史の、言わば「舞台装置（シナリオ?）」みたいなものがあるわけであるので（知れば知るほど、その実感は募る!）、それを何とか、自分なりにまとめてみたい！今、そういう思いで一杯なのである（本当に、そこには、多種多様な情報・研究成果？があるものである！そして、多分？そこには、もう既に、史実解明の材料自体は揃っているのかもしれない?）！

そんな中、今回私が、改めて重要視したい視点（解明の起／基点?）は、中国（当時の「唐」→945年の『旧唐書』）からみた「倭国（九州?）」と「日本国（近

畿大和?)」の並立(相剋?)の実態ということになるが(そこには、「倭国伝」／「日本(国)伝」の双方があり、当時の「唐」側には、「二つの(倭)国?」が認知されていた!)、それに対応する(時代の)日本側の記述(「記紀」)が、それと、どのように整合化されるのかということである?!

たとえ、情報不足や誤解・曲解があって、認識に混乱があったとしても、そのこと自体(「倭国」と「日本(国)」の並立的存在?)は、大枠では真実であったと言わざるを得ないのである!何故なら、そのこと自体で、「唐」側が、嘘をつく必要はまったくないからである(認識への矜持もある?)!それくらい、当時の中国(唐)にとっては、倭国の実態(実体?)は自明のことであった?!

そこで、今回の新たな旅は、そのことを切り口(出発点)にして、そうした「二つの(倭)国の並立と相剋?が、我が国の建国史をなしている!」ということの解明(証明?)を、改めて行っていけばよいということになるわけであるが、具体的には、どのような解明の方法(段取り)が考えられるのかである?!

ただし、これについては、これまでも何度も述べてきたが、例の「倭の五王時代(5世紀)」、つまり、『宋書』等が示すそれらの記事と、一方の「記紀」が示す「(崇神→)応神→雄略」辺りの記事との整合性(真実?)を、いかに解明するかであろうことは言うまでもない!さらには、その後の「継体→欽明」辺りの記事も、当然視野に入ってくるであろう?!

そして、もちろん、そこでは、かの「天日矛<sup>あめのひぼこ</sup>(ツヌガアラシト?!)」 「神功皇后」「武内宿禰」「住吉大神」等の絡み、あるいは「伽耶(加羅)」「新羅」「百濟」等との対外関係(「高句麗」の動きとも関係して!)が大いに関わってくるわけであるが、それら(の謎?)が、「二つの(倭)国の並立と相剋?」という視点で、どのように解きほぐされてくるのか?そこがポイントとなるということである!

とは言え、その辺りの真相が、これも繰り返しになるが、「記紀」においては、まったく見えてこない(隠されている?)ということでもある?!

私の立場からすれば、「記紀」編纂者達(直接的には、「持統・藤原体制」!)が、そのように目論んでいるということであるので(かなり定説化されてきている?)、まさに当然ではある訳である?!

いずれにしても、今現在、改めて意を強くして思うことは、実際に、そこで繰り広げられたであろうことが、中国側(当時の「唐」→『旧唐書』)からみた「倭国(九州?)」と「日本国(近畿大和?)」の並立(相剋?)ということであったわけであるので(つまり、そのプロセス・内実が、中国側(「唐」)の認識の根拠でもあった?!→そうとしか考えられない!)、そうした視点に立った史実の解明(論証?)がなされなければならないということである!

逆に、そう出来なければ、中国(唐)側の認識そのものが間違っていたこと

にもなるわけであるが、単純に言えば、1世紀代の「(倭→倭) 奴国」以降(「邪馬台国」時代も含めて)、「倭国」自体(本体)は九州にあったのであり(→かの663年の「白村江の戦い」の主体は九州倭国であった?!)、一方で、中国(唐)側が公式には認めていない(知らない?)近畿倭国(「日本国」)が別に生まれ、発展し、その双方の国の情報(使者?)が、ある時に(から?)同時に、中国(唐)側へ入ってきたということである?!だから、混乱した?!

しかしながら、明らかに、「記紀」(持統・藤原体制)は、その後者の立場で、「倭国(→日本国)」史をまとめ上げている(かなりの矛盾や不審点を示しながらも?)?!しかも、事実の大枠としては、そうなっているわけでもある?!したがって、要は、これを、いかに正確に解明(証明?)するかなのである?!

しかるに、「記紀」(持統・藤原体制)は、「崇神」(第10代)以前の歴史(3世紀以前?)は、自らの政権の正統性/正当性(の淵源)を遡及させるべく(「万世一系」)、様々な文書・言い伝え等を駆使して(知り得ていた事実を核として?)、そして、自らに同調・加担した氏族・勢力(中臣氏/息長氏/秦氏/賀茂(直)氏等)に配慮(忖度?)しながら、神話や関係人物の事績話を創り上げた?!

そして、一方で、「(645年の)乙巳の変(大化の改新)」以降の歴史は、自ら(持統・藤原体制)の直接の先祖達が行った所業(悪事?)を出来るだけ量し(はぐらかし?)、他方で、正統・正当な「蘇我氏(上宮王家?)」の存在と活躍(「物部氏」「葛城氏」「尾張氏/海部氏」「紀氏」等→「武内宿禰」諸族?を含む?!)を歪曲(抹殺?)し、その史実を隠した?!

もし、そうであれば、「記紀」(建国史)の謎は、大きく捉えれば、「倭の五王以前」、「倭の五王時代」、そして、「倭の五王以後」の、言わば「三つの大きな山(謎の塊)」として構成されているということになる?!それが、「神武~崇神」「崇神~応神」、そして、「応神~持統(推古?)」ということであるが、それ故に、今後は、この「三つの大きな山(謎の塊)」を、いかに捉え、そして、それらを、いかに整合的に解明するのかということになる?!

ただし、事実上は、その中の「倭の五王時代」、つまり「崇神~応神(正確には、~継体~欽明を含む!)」の真相が最も大きな山(謎の塊)、順番的には「第二の山(謎の塊)」となっていることは明白であり、その解明が重要な鍵となっていることは言うまでもない?!だが、これもまた繰り返すが、ここの部分が、一番量されている(荒唐無稽化されている?)わけであり、逆に言えば、それだからこそ、最も核心の部分であるということでもあるわけである?!

ちなみに、そこには、関係氏族・勢力の、それこそ一族・類縁の命運を賭けた必死の攻防(生存競争)があったことが容易に推測され、それを知らされる我々には、誠に迷惑な話となっているのでもある(つまり、この現代に至るまで、自国の歴史/建国史が分からないという情けなさ?が続いているわけである!)?!

## ② まずは、最大（第二）の山（謎の塊）?!「崇神～応神（～継体～欽明）期」!

ということで、まずは、その三つの山（謎の塊）の中心とも言うべき「第二の山（謎の塊）」、「崇神～応神（～継体～欽明）期」（「応神」自体は、4世紀末？）の真相（怪？）を、どのように解明（説明）出来るかである?!もちろん、そうならざるを得なかった（「第二の山（謎の塊）」となった）理由（原因？）がそこにはあるということであるが、改めて、その理由（原因？）とは何なのか？

すなわち、その「崇神～応神（～継体～欽明）期」が、国内外において、量的にはもちろん、質的にも大きい様々な変化（人や場所の移動等も含めて!）が顕著だということであるが（考古学的には、騎馬民族的な、あるいは百済系の文物・事績の多出!）、その経緯の中で、後の「倭国（→日本国）」の実体（二つの倭国?）が形づくられたことは間違いないと思われるのである?!

繰り返しになるが、「記紀」（持続・藤原体制）は、その辺りの事情（史実?）を最も暈したり、はぐらかしたりしているわけでもある?!だから、最大の山（謎の塊）ともなっているのでもある?!

例えば、「応神」（第15代。ただし、実際は、彼に仮構された人物がいる?）が、朝鮮半島からの渡来系（扶余／高句麗系、いわゆる「騎馬民族系」、その血脈を有する「百済系（王族）」）であることは、ほぼ間違いないと考えられるが（そのこと自体はそれでよいのである!事実であれば、当然である!）、問題（謎?）は、その「応神」が、「記紀」では、「神功皇后（息長足おきなががたらし姫）」と「仲哀ちゅうあい天皇」（「崇神」「垂仁」「景行」と続く、いわゆる「大和朝廷（天皇家）」の嫡流で、直接的には、「景行」の子の「ヤマトタケル命」の子）の子とされているということである!

しかも、その父親である「仲哀天皇」については（も?）、非實在（ダミー?）の可能性もあり、一方で、「武内宿禰」あるいは「住吉大神」が、その父ともされているようなものでもある?!真に、困ったものなのである?!

そして、さらに困ったことに、その母親とされる「神功皇后（息長足姫）」も、例の「卑弥呼」ないし「台与」のダミー?とも考えられており（←紀年120年の繰り上げによって!）、そうなると、他ならぬ、その「応神」自体の出自あるいは、その血統はどうなっているのか?という（「胎中天皇」と言われたり、越の敦賀で、「気け比ひ大神」（伽耶王子ツヌガアラシト）と名前を交換したりと、幾つかの信じられない?説話が記されている!）、実に不可解（不都合?）な事態を招くのである!

そしてまた、これは、上記とは別次元の話ではあるが、彼は、百済系の王族とは考えられるが、二人の別人（百済残国兄王「滕とう」／本家?沸流びりゅう系王族と「毘支こんぎ」／支流?仇台くで系王族）が、その候補と考えられているのである（前者が兼川晋説、後者が石渡信一郎説）!改めて、一体これは、どういうこ

とになるのか？

さらに、それと、もう一つ謎（怪？）なのは（こちらの方が、より大きな意味を有している？）、その「応神」が、いわゆる「八幡やわた大神」とされ（「宇佐神宮」の主祭神？）、おそらく？「新羅系」の祭神ともされているということである！ただし、このことについては、母親（神功皇后／息長足姫）が、新羅系の「天日矛（ツヌガアラシト?!）」の血脈とはされているので、一応は、首肯されないこともない?!

であれば、父親の「仲哀」が「百済系」なのか？しかし、その「仲哀」の父親とされる「ヤマトタケル命」自体も、非実在の可能性が高い人物なのでもあり、その辺りがまったく分からなくなるのである（むしろ、彼に纏わる「武内宿禰」や「住吉大神」との関係が問われてくる?）！

ということで、現時点では、これ以上の解明（追跡?）は難しいのであるが、一方で、冷静に考える（見方を変える）と、その「応神」が、渡来系の「百済」と「新羅」の合作（融合?）人物ということは考えられないか?!というのも、「記紀」（持統・藤原体制）は「百済系」ではあるが、その背後には、「新羅系」の「息長氏」（そして、「秦氏」も?）の姿が見え隠れするからである！

つまり、「神功皇后」の本名?は「息長足姫」であるし、後の「舒明（田村皇子）（第34代天皇で、「皇極」の夫）も、実は、「息長足日広額たらしひひろぬか天皇」という和風諡号を有しているのである！

そこで、もし、「百済系」（の誰か）と「新羅系（息長氏）」が、いつの頃からか協力関係を結んでいる（婚姻している?）としたら、その「百済系」と「新羅系（息長氏）」の合作（融合?）話は、俄然真実味を帯びてくることになる?!端的に、その両者が、いわゆる「合意」の下に、「記紀」のストーリー（少なくともその部分?）を創り出したと言えないかということである?!

ちなみに、その「息長氏」は、当初、『隋書（636/656年）』に出て来る「秦王国（豊前／香春岳かわらだけ周辺?）」に居住し（製銅・製鉄氏族?その地に、「韓国息長大姫大目からくにおきながおおひめおおま命」を第一の祭神とする「香春かわら神社」がある!）、「応神」もまた、北部九州（宇美?）で生まれ、そこから東に向かって進出したことになっている！ならば、そこ（北部九州）に、「息長氏（新羅系）」と「応神（百済系）」の関係が出来上がっていたと言えないか?!

なお、その傍証として、「応神→八幡大神」の、「宇佐神宮」での主祭神化があり、また、その「宇佐神宮」は、件の「香春神社」とは、密接な関係（共同祭事）がある?!もし、そうであれば、「応神」の実体（正体?）は、かなり鮮明に炙り出されてくる?!

だが、そこでも厄介なのは、その「息長氏」は、周知のように、「琵琶湖東岸」を根拠地とした、近畿の有力豪族の一つともされていることである！そし

て、その対岸（琵琶湖西岸）からは、これもまた不可思議な「継体（第26代）」という人物も出ているのである！しかも、詳しい経緯はともかく、「記紀」によれば、後の「持統・藤原体制」は、その「継体」から生じているのでもある！

そして、その間には、これもまた、実は不可思議な「欽明（第29代）」という天皇（蘇我氏の実祖？上宮王家？）もいるのであるが、通して言えば、「応神」から「継体」、そして「欽明」へと続く、一連の繋がり（「万世一系」）が、本当にそうだったのかどうか？それとも、実は違っていたのか？その辺りが、よく分らない？そういうことにもなるのである（もちろん、「応神」と「崇神」の関係もそうである？）！

そこに、改めて、「物部氏」「蘇我氏」「葛城氏」「尾張氏」等、さらに、そこには、実は「秦氏」や「賀茂（直）氏」も絡まってくるのである！そして、彼らの足跡と関係は、その後、かの「淡海三船」によって示唆（漢風諷号）されているように？、「神武」「崇神」「応神／神功皇后」の「神関係（トリプルスピルン?）」として描かれているということである?!

しかも、それは、「応神／神功皇后」を起（基）点とした、「近畿倭国→日本国（大和朝廷）」を形成してきた氏族・勢力の関係（時代順も?）を示しているとも思われるのである?!ある意味、大変な構想力、否、トリックと言える?!

いずれにしても、「記紀」は、このような関係諸氏族の利害得失あるいは氏族・勢力関係の中で、その中の「勝者側」が、自らに都合のいいような「歴史（国史）」として書き上げられたものだということでもあるが、その中心に（黒幕として?）いたのが、「藤原氏（「不比等」）」であったわけでもある（「不比等」という名前が、そのことを如実に示している?→不遜極まりない名前?）！

ちなみに、それらは、「江南系」（漁撈・農耕・交易民／安曇族・海神わたつみ族）→「伽耶・新羅系」（製銅・製鉄・交易民／山祇やまつみ族）→「百済・北方系（扶余系）」（製鉄・土木／騎馬・部族民族）の渡来と関係を、一方で暗示しているということも考えられる?!

すなわち、それらは、まずは「北部九州（朝鮮半島南端部を含む!）」の「江南系倭人（安曇族・海神族）」（その根拠地が「（倭）奴国」。「環濠集落」や「銅鐸」等の保有者）が全国に広がり、その後「倭国大乱」（2世紀末）を契機として、「伽耶・新羅系倭人」に、その覇が移り（「伊都国」から「宇佐」「吉備」「出雲」、そして「近畿」等に進出?）、そして、最後に「百済・北方系（扶余系）倭人」が、中北部九州（筑後川沿い）から、全国に広がっていった?!

それ故に、ここで言う「三つの山（謎の塊）」とは、換言すれば、上記の、三つの「渡来系倭人」の事績のことを指すこととなるが、これらは、果たしてどうなのか?!ただし、それらについては、まずは、北部九州での出会いから始まったものであることは言うまでもない（地勢的にも、一番可能性が高い!）?!

### ③ その最大（第二）の山（謎の塊）は、「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きと関連している?!

ところで、ここで新たな情報（史実?）を加えてみたい！それは、筑後（久留米・八女）地域の「三沼君（→筑紫君？）氏」の事績（最も重要な「大善寺玉垂宮」や「高良大社」等に関わる?）のことである！

この辺りの事情は、これまでの史実解明とは、かなり異なった様相を呈することとはなるが、要は、その最大（第二）の山（謎の塊）は、筑後地方の「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きと関連している?別言すれば、後に重大な結果をもたらす、複雑な?（九州）倭国（筑紫倭国／豊国倭国）の実態（体?）を解明するためには、その「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きに、もう少し注目すべきなのではないかということである（そこに、二つの「倭国」の萌芽もある?）?!

しかるに、その「三沼君（→筑紫君？）氏」の存在・動向は、その後の「宗像大社」の隆盛?とも連動しているようであり（宮島正人『「倭」の神々と邪馬台国 志賀島・宗像・八女』海鳥社、2018年）、もし、そうであれば、例の「磐井の乱」（528→517?年）の真実等も、そうした観点から見直す必要が出てくるし、何よりも「（九州）倭国」の実態（体?）が、かなり錯綜したものであったということ、改めて加味していかなければならないということになる?!

言い換えれば、「邪馬台国（連合）」（の消滅／解体?）以降（3世紀末?）の九州（中北部）の状況が、実際にはどのようなものであったのかということであるが、単純に、邪馬台国あるいは倭国九州説といっても、それ自体が、かなり複雑な様相を有していたのであり、改めて、それと、一方の近畿大和説との整合性、というよりは「関係性」を、いかに見出していけばよいのかという、新たな課題を生じさせるものでもあるということである?!

具体的には、そうした大きな解明枠組みは、端的に言えば、4世紀以降?の（九州）倭国が、現在の久留米市辺りを中心とする「筑紫倭国」と豊前地方（福岡県東南部と大分県の北東部）にあった「豊国倭国」の二つ（の倭国?）からなり（関係的には、後者は、前者の分枝国（檐魯国）であった?）、例の「磐井の乱」を境にして、後者が前者を凌駕?して、その後、後者（息長氏や秦氏の一部?）は、何らかの理由・形で、近畿（北陸を含む）へ移動していった?!

そして、残った「（九州）倭国→物部氏（亀鹿火）」の勢力は、新たに「（九州）倭国」を牛耳り、そしてさらに、そこから「上宮王家（→蘇我氏）」も起こり、彼ら（の主力?）も、やがて近畿大和（飛鳥）へ移動していった（→推古朝?それが、いわゆる「飛鳥時代」とされるものである!）?!ここに、改めて、事実としての「二つの倭国（九州と近畿）」が並立するということである?!

ということで、3世紀末?の邪馬台国（連合）の滅亡（解体?）後、（九州）倭国は、筑紫と豊国に分かれて、その豊国倭国（の主力?）が、その後、近畿

へ移動（進出）した?!その移動（進出）が、いわゆる「応神」の時であったのか（多分?「仁徳」に被されている?）、あるいはまた、「継体」の時であったのか、まだまだ結論は出せないが（双方があり得る?）、そのこと自体は、おそらく事実であったろうということである（それが、まさに「倭の五王」の時代でもあった!）?!

また、そうでなければ、他ならぬ「物部氏」や「息長氏」、さらには「秦氏」等の、両地域（北部九州と近畿・北陸）での蛸集・活躍は説明出来ないし、「二つの倭国の並立論」も成り立たない（ただし、これ自体の見解は、私個人のものではあるが、強いて言えば、「兼川説」と「石渡説」の融合?ということになるだろうか?）?!

とにかく、もし、そうであれば、そもそも、何故、そのようになったのか?そして、それは、どのような形で進行していったのか?そこの部分の解明が、是非とも必要となってくるということである?!

なお、ここの部分の解明を精緻に行われたのが、まさに兼川晋氏ということになるわけであるが（「筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋」というような解明枠組みの提示）、その複雑な様相については、そうした枠組みとの照合の中で、改めて整理（解明）されなければならないということにもなる?!

ただし、兼川説自体は、すべてが九州の領域内に留まっている!折角、「豊国倭国」の実態（体?）を解明されているにも拘らず（特に、いわくの「九州年号」の解明!）、近畿大和への広がり、つながりが見えていない（敢えて、そのようにされているのかもしれないが、本当に残念である!）?!

このように、ここでは、「筑紫倭国」と「豊国倭国」の分立（→後者の分離・独立?）が、どのようになされていったのか?ということであるが、その鍵を握っているのが、実は、筑後地方の「三沼君→筑紫君氏?」の動きであるということである?!

だが、そこで問題となるのが、「記紀」が一番暈している「武内宿禰系／葛城諸族（蘇我氏・葛城氏・紀氏・波多氏・巨勢氏・平群氏等）」の存在と、その絡みである?!何故なら、件の「三沼君→筑紫君氏?」の活躍の場所が、一方では、その「武内宿禰系」及び「神功皇后（息長足姫）」の活躍の場所と重なるのである（「大善寺玉垂宮」「高良大社」等）!

しかも、その「葛城諸族」の名前と同じ土地名（の並び）が、近畿大和にも、何故か?あるのである!ということは、それは、そこにいた「諸族」が、ある時に大挙して、近畿大和へ移動（進出）したということにもなる?!

しかも、他方で、その出発地?の近く（現みやま市）には、百済系勢力の存在を示す「こうや（こうら?）の宮」（正式名称は、「磯上いそのかみ物部神社」）があり、そこには、かの有名な、百済からの贈り物「七支刀」と同じものと思われる刀を捧げ持つ「百済武官?」の像があるという（←兼川晋氏）!そうなれば、

そこには、かの「物部氏」の根拠地（出発地？）もあったことになる?!

なお、その実物の「七支刀」は、現在、近畿大和（天理市）の「石上いそのかみ神宮」に奉斎されている！そして、その「七支刀」は、ある時（「崇神」の頃?）、「吉備」（現赤磐市）の「石上布都魂神社いそのかみふつのみたま（物部神社?）」から移動してきたとも言われている？しかも、その「石上布都魂神社」の祭神は、驚くなかれ、「素戔鳴命←布都魂／十柄劍」であるということでもある?!

こうなってくると、この辺りのことは、改めて、ほとんど混沌としてくるのであるが、これも、ある一つの仮説（こちらは、まだ妄想かも?）を立てれば、説明出来ないわけではない?!それは、古代最大の豪族?である「物部氏」（直接的には「あらかい 鹿火」から?）や「蘇我氏（←武内宿禰系）」は、北部九州で興った氏族・勢力であるということである（ただし、後者は、もともとは朝鮮半島から渡来?さらには、シルクロードを伝って、西域から移動してきていた?）?!

そして、おそらく、後者の「蘇我氏」は、ある時期から、その「物部氏」と血縁関係を結んだということであり（そこから「上宮王家」も生まれた?←兼川晋氏）、これらの「諸族」（「尾張氏」も含む?）が、ある時から近畿大和に大挙?移動（進出）し、「記紀」が示す、（多分?6世紀以降の）近畿大和の「大和朝廷→日本国?」を創り上げた?そういうことである?!

なお、ここでは、いわゆる「物部氏」の系統（三つある?）に関わって、「饒速日にぎはやひ系」と「火明ほあかり系」について触れておきたい！まずは、「記紀」は、その物部氏の祖を、双方共に「にぎはやひ」としているが、後の、物部氏の伝承物?とされている『先代旧事くじ本記』（9世紀初頭?）では、「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊あまてるくにてるひこあまのほのあかりくしたまにぎはやひのみこと」とされており、彼?が、すべての「物部氏」の祖とされている?!

しかし、実は、「饒速日」と「火明」は別系で、強いて言えば、前者が「大和物部氏（「可美真手うましまで」系）」、後者が「筑紫物部氏（「天津麻良まら」系）」ということであり、もちろん前者が、通説の「物部氏」であるとされたわけである（ちなみに、「河内物部氏」は、前者の「可美真手うましまで」系の一部であった?）?!

いずれにしても、「記紀」においては、この「物部氏」の近畿・大和への進出が、かの「崇神＝御間城入彦五十瓊殖ミマキイリヒコイニエ」の事績として描かれていると考えられるが（第2の「御肇国天皇ハツクニシラススメラミコト」とされている!）、これらは、おそらく、伽耶（多羅?任那?）からの渡来系倭人、すなわち「三沼君氏族」のことであろう?!そう考えると、かなりの謎が氷解する?!

しかし、そうなると、改めて、同じ経緯の（時代や活躍場所が重なる?）「武内宿禰系諸族」との異同が、ここでは問われてくる?!三沼君氏族＝武内宿禰系諸族なのか（否、やはりそれは違う?）?!ただ、三沼君氏族（→「崇神」?）が、この「物部氏」の核であったことは、ほぼ間違いないことではあろう?!

④ 改めて、「応神（天皇）」を、「伽耶・新羅系勢力」と「百済・北方系（扶余系）勢力」の「合体（天皇）」としてしてみると、果たしてどうなるのか?!

そこで、ここでは、改めてであるが、件の「応神（天皇）」を、「伽耶・新羅系勢力」と「百済・北方系（扶余系）勢力」の「合体／融合（天皇）」としてみるとどうなるのか? そうみると、後の「百済系勢力」（持統・藤原政権）と「伽耶・新羅系勢力」（息長氏、そして、秦氏、賀茂（直）氏等?）との関係が、かなりスムーズに了解されるのではないか?!

そうすれば、それ以前までの権勢を失った?、時の「伽耶・新羅系勢力」にとっても、自らの自負（正統性→王権?）が認められることになり、それ相応の着弾地（妥協点?）が見出されることにもなる?! 要は、それ（「記紀」上での合作／融合?）について、当該の氏族・勢力達が、互いの思惑と了解の下で、そのような創作（歴史改竄?）を行っているのではないかということである?!

しかるに、史実は、明らかなように、「百済・北方系（扶余系）→百済王族」の末裔?である「藤原氏」の一人勝ちとなったわけであるが（特に「桓武」以降!）、そのようにすれば、双方共に顔が立つ? ということではなかったかということである?! そして、穿った見方をすれば、「百済系勢力→藤原氏」にとっては、自らの政権のやましき（あくどいやり方で、次々と政敵を亡き者にしてきた!）を払拭させることができる?!

そして、一方の「伽耶・新羅系勢力」にとっては、そのストーリー（合作／融合）を受け入れることによって、自らの過去の栄光や実績（→実益?）を担保することができる?! まさに、そういうことではなかったかということである?! そして、そのストーリー（合作／融合）の起（基）点が、他ならぬ「応神」と、彼を取巻く「諸人物」の創出と関係づくり（捏造・歪曲）であったということである?!

尤も、そうしたストーリーづくりは、まったくの嘘や出鱈目では、もちろんダメであり（すぐにバレるし、信用をなくす?）、一応の史実に基づくものでなければいけなかった! だから、そこで最も意を注がれたのが、まさしく「万世一系」の皇統譜づくりでもあったわけである（それが、由緒ある国／政権の証しでもあるからである!）! もちろん、そこには、モデル（あるいはダミー?）となった、実在の人物達がいたわけでもある?!

ただし、その実在の人物達には、多様な実態（実体?）があり（土地々によって違って!）、伝わっている「伝承」や「系図・名前」等が違って!（それだけ、関係の氏族・勢力、人物達が各地に動いていたということであり、自らの血統、実績?に自負を持っていたということでもある? 地名移植等も含めて!）?! したがって、そのような、言わば多様な（その意味で頼りない?）人物群や事績等の情報を下に、それぞれの登場人物（そして、「神」?）をキャスティング（同

定配置)させていったわけである?!

そこで、改めて、その中心となる「応神」であるが、そのモデル(実際上の人物)は、どこの、誰であったのか?!私は、既述もしたように、今のところ、それは、双方ともに「百済系の王族」ではあるが、二人の人物が有力な候補なのではないかと受け止めている!

すなわち、一人が「滕とう→藤大臣?」(百済残国兄王/本家?沸流系王族)という人物であり、もう一人が「昆支こんき」(百済支流仇台系王族)という人物である(ちなみに、前者が兼川説、後者が石渡説)!前者の「滕とう→藤大臣?」は、高句麗による「第一次百済滅亡」(396年)の時の、本家?(沸流系余氏)の「百済残国」の王とされる人物であるが、その滅亡前に本国を逃れて(捨てて?)、北部九州(「貴(基肆/木?)国」)に渡ってきていた?!

なお、彼は、「武内宿禰」(ひょっとしたら?本人?)や「神功皇后(息長足姫)」と関係があるとされ、近くの「大善寺(玉垂宮)」や「高良大社」の祭神と目される人物でもある(→「高良大明神」?ただし、これについては、当地の「三沼君→筑紫君氏?」との関係も考えなければならない?)?!

後者の「昆支こんき(倭王「旨」?)」は、例の「倭の五王(興?)」の時(「記紀」によれば、「雄略期」!461年?)に、弟の「軍君こにきし」と一緒に、倭国へ人質(入り婿?)として送られてきた「百済王族」とされるが(実は、弟の「軍君→男弟王」が「継体」と考えられる?!)、こちらは、本家?分枝の「仇台系余(←牟)氏」の王族であるとされる(「応神」の諱いみな「ホムタ(品/誉田)ワケ」の「ホムタ」が、「昆支→ホムチ→ホムタ」に通じるという指摘もある?)!

余談だが、ここで「人質」と言っても、百済の「檀魯たんろ国家(新たに開かれた国で、そこに王族が送りこまれる!)」においては、親族は、みな「王位継承権」があり、その一つとなった?「(九州)倭国」も、その権利(しかも本家?としての)を有していた(→それが、かの有名な、「倭の五王」最後の「武」による、宋に対しての、「百済」を含んだ「7か国の軍事統帥権(軍号)」の主張となった?)?!要するに、単なる「はったり(誇張?)」ではなかったということである?!

ちなみに、石渡説によれば、「応神」と「継体」は兄弟(通説は5世孫!）、「欽明」は「応神」の子とされ、「継体」の子・「安閑」と「宣化」とは従兄弟関係ということになる?!しかし、通説のように、「欽明」が「継体」の子であれば、「安閑」と「宣化」とは兄弟(母親は違う!)ということになる(いずれにしても、「欽明朝」と「安閑・宣化朝」は並立していたとは言える?)?!

だが、問題は、このいずれの場合も、「応神」は「百済系(王族)」となるので、一方の「新羅系」の要素(血?)はない?!そうになると、ある意味必然的に?、母親の「神功皇后(息長足姫)」から(「仲哀天皇」との父子関係もあるが?)、その新羅系の要素(血?)をもらっていることになる?!本当に、そういうことで

あったのかということであるが、「神功皇后（息長足姫）」という仮想の人物（偉大な女傑？）が創出され、それを介して、まさに両者（「百濟系」と「新羅系」）が合体／融合されたということになれば、その謎？は、一応は解決される?!

何故なら、彼女は、一方の「新羅系」の始祖？「天日矛」の末裔ということになっているからである！ただし、「神功皇后（息長足姫）」は、他方では、3世紀半ば頃の「卑弥呼」または「台与」を連想させるものともなっているので、時代設定的には、かなりの矛盾がある（「天日矛」の来日は4世紀半ば頃?）?!

であれば、その可能性は、「息長氏」、それ自体にあることになる?!つまり、豊前（香春岳周辺→「秦王国」?）にいた「息長氏」（多分「秦氏」も!）と「九州（筑紫）倭国」に渡来してきた「藤→藤大臣→応神のモデル?」が結託（婚姻?）して、一つの大きな勢力をつくったということである?!

ちなみに、「伽耶・新羅系倭人」の信仰対象は、まさに「太陽」であり、その信仰形態は、いわゆる「ヒコ／ヒメ制（太陽感精?）」であった?!すなわち、「太陽」が「男性」であり、その「精?」を受けるのが「女性」ということである?!それはまた、「太陽」と「山（神奈備山）」の関係となる?!こうした「ヒコ／ヒメ制」の存在は、全国各地にある「夫婦（もしくは兄／妹、その逆も!）神」を見れば、一目瞭然である?!

したがって、また、「山（の神）」は、それ故に「女性」と考えられ（だから、逆に「女人禁制」ともなった?）、それと一体化した（憑依する）、かの「巫女（斎宮?）」と呼ばれる「女性」は、それを顕現させる存在であったわけである（通説の、女性としての「天照大神」が、最初は「大日靈貴オオヒルメノムチ（「偉大な巫女!）」と呼ばれたのはそのためである?）?!

なお、その太陽は、ある時は「龍神」となり、恵みの雨をもたらすものでもあった（ただし、これは、本来は「南方系」か?）?例の「伊勢神宮」の大神（「大物主神?」）とその「斎宮」との逸話（その大神は、まさに「龍＝蛇」であったという話!）があるが、そうした関係は、後の「伊弉諾／伊弉冉」（アダムとイブ?）のパロディ?を持ち込むまでもなく、伽耶・新羅系の渡来系倭人（太陽信仰族）のものであることは明らかである（当地にも、同じような逸話がある!）?!

ちなみに、最初の「伽耶・新羅系倭人」の渡来地である「伊都国」には、「高祖たかす山」というものがあり、その麓には「高祖神社」（祭神：彦火火出見ひこほほでみ／玉依たまより比売／息長足姫。ただし、本来は「高磯たかそ比売」→「比売許曾ひめこそ」だった?）もある！また、そこには、例の「天日矛（太陽神?）」の苗裔と称した「怡土県主／五十迹手いとて」がいた（新羅遠征の神功皇后を招き入れたとも?）!しかも、ここは、例の「倭国大乱」の影響を受けていないともされる（実は、そこの勢力が、「倭国大乱」の首謀者であった?）?!だが、その「倭国大乱」は、「吉備」が出发点であった?!ここを、どう処理するかではある?!

## ⑤「太宰府」は、「(九州)倭国」の首府であった?!「倭の五王」時代の真実?!

一方、九州勢力の近畿移動（何波にも亙る？）は、北部九州に残っていた？倭国勢力（本家？）が、その後、どのような展開となっていたのかという問いを、改めて生み出す?!何故なら、彼らのすべてが、近畿大和に移動したわけではないし、以下に示すように、そこには、厳然と「主権国家？」（→600年の、アメタラシヒコ／天足彦の「大倭＝倭<sub>たい</sub>？国」）が存在していたのである?!

そして、それが、「三沼君→筑紫君氏？」→「磐井氏」→「阿每（天）氏」？の事績とつながっているということであり、とりわけ、その国の首府となっていた「太宰府」（470年頃、倭王「武」によって造られていた？）の存在が、改めてクローズアップされてくるのである！だから、そのことは、「磐井の乱」の捉え直しや「高良大社」等の意味を再考させるものでもあるのである?!

しかるに、『宋書』（倭（倭）国伝）によれば、倭王「武」は、478年に中国宋朝に対して、「自ら開府儀同三司を仮し」とする上表文を送り（「三司」とは、中国古代の官名で、太宰<sub>ださい</sub>・太傅<sub>だいぶ</sub>・太保<sub>だいはほ</sub>の「三公」のこと）、「中国に倣<sub>な</sub>らって自ら都を開き、三公も設置した」と述べているのである！

これは、まさしく彼が、一つの国（中国の「冊封国家」）であることを主張していることになるわけであるが、しかし、そのこと自体は、「記紀」にはまったく触れられていない（しかも、「磐井の乱」の位置づけからも分かるように、九州の当地は、まだまだ「大和朝廷」のものにはなっていない!）！

であれば、太宰府の「都督府跡」「観世音寺」等に示されている、残った? 「(筑紫)倭国」の事績は、どのように理解されるのか？

さらに、通説では、663年の「白村江の戦い」の敗戦による、唐・新羅の本土進攻に備えるため、「中大兄皇子」（後の「天智天皇」）の命によって、太宰府近辺の、「水城<sub>みずき</sub>」「大野城<sub>おおのじょう</sub>」「基肄城<sub>きいじょう</sub>」といった城（朝鮮式山城）が、ほぼ同時期に建造されたとされているが、その後の発掘調査によって、その通説は、変更を余儀なくされそうでもあるということである?!

と言うのも、それまでの定説では、「太宰府」（「都督府跡」）の、現在地上に見える礎石は創建時のもので、上層の建物は、941年の「藤原純友の乱」によって炎上し、その後再建されることはなく、事実上終息したとされるらしいが、その礎石の下に、同じような配置の礎石が確認され、さらに、その下層に掘立柱建物の柱穴があり、遺構は、大別して三期からなるらしいのである?!

ただし、それらについては、いろいろ帳尻が合わされている? ようではある?!第一期の掘立柱建物は、663年の「白村江の戦い」の敗戦後に、水城・大野城・基肄城と同時期に建造され、第二期の地中の礎石建物は、「大宝律令」施行の702年頃に建造され、941年の藤原純友の乱により焼失した。現在地上に見える礎石は、その後に再建された建物のものであるとか? という具合に!

一緒に出土した瓦や土器片が、それを裏付けるらしいが、10世紀半ば以降の太宰府再建ということであれば、その国家的大事業が記録に残らないはずはない？第二期の建物にしても、大宝律令施行の702年頃の建造だとすれば、律令制のシンボルとして記録も必ず残されるはずであるとされるが、その記録も、一切存在しないということである！

だが、それよりも何よりも、新たに注目されるのは、その周辺に、そこが「一国の首府」であったことを示す（「宋」の「冊封国」としての？）「地名」や「建物（跡）」群があることである?!それが、上記の「太傅府<sup>だいぶふ</sup>（天子の養育に携わる官府）」と「太保府<sup>だいほふ</sup>（天子の徳を保ち安んずる官府）」というものであり、これと「太宰府」を合わせれば、そこが、ある国の「首府」であったことは揺るぎない事実であるとされるのである?!

その両者であるが、前者（使用漢字は違うが、読みは一緒!）は、太宰府の北東約14kmの地（飯塚市大分<sup>だいぶ</sup>）にあつて、そこには、現在「大分<sup>だいぶ</sup>八幡宮」（祭神は応神天皇・神功皇后・玉依姫命）があるという（「宇佐八幡宮」の社伝『八幡宇佐宮御託宣集』によれば、「大分宮は我本宮なり」とされ、また、「宇佐八幡」「石清水八幡」とともに、日本三大八幡宮の一つである「箱崎八幡宮」は、923年（759年説あり?）に、大分宮から箱崎の地へ遷座されたものでもあるらしい!）!

また、その大分八幡宮の東（約1km程の所）には、「大分<sup>だいぶ</sup>廃寺塔跡」と言われる古代寺院跡もあるらしい!

なお、近くには（嘉穂郡桂川町寿命）、「王塚古墳」もある（6世紀の前方後円墳で、石室の大部分は地元産の花崗岩等が使われているが、石屋形や石枕・灯明台は阿蘇の溶岩製。このことは、この墓の主が、単なるこの地の豪族でないことを物語る。石室内は壁面全体に色彩豊かな文様が描かれ、石枕・灯明台を設置するなど、その構造にも技巧を凝らしている。「装飾古墳」としての豪華さは、他に例をみない超一級のものであり、おそらくこれは筑紫王家の墓であったろうとされるものである?）!

後者（使用漢字も、読みも、少し違うが?）は、小郡市大保<sup>おおほ</sup>という所で（太宰府の南、約14km）、「御勢大霊石<sup>みせたいれいせき</sup>神社」があり（旧石器時代から8世紀後半に掛けての複合遺跡で、建物跡群は筑後国御原郡の郡役所跡であろうと推定されているが、規模が異常に大きいとされる!）、社伝によれば、神功皇后が、熊襲征伐のおり、この地で死んだ仲哀天皇（第14代）の代わりに、御魂代の石を軍船に積み鎧兜を着せ、三韓遠征を行い、帰国後に、その石を、殯葬<sup>ひんそう</sup>（かりもがり）のこの地に奉ったということである?!

したがって、この神社は、「仲哀天皇」の「殯葬伝説地」、すなわち「殯宮<sup>ひんきゆう</sup>」であるということであるが、その由緒は、後に神后皇后伝説として創作されたものであろうとはされる?!とは言え、その創作の背景にあるのは、この地が、まさに「太保府<sup>だいほふ</sup>」の地であったということではなかったか（近

くには、「井上麿寺」もあるという!)?!

いずれにしても、このように、この一帯に、「太宰府」(+観世音寺)、「太傅府」(+「大分麿寺」)、「太保府」(+「井上麿寺」)があったということであれば、その一帯が、ある時期の「国の首府」であった証拠であり、それが、「(筑紫)倭国」と呼ばれるものであったことは、おそらく間違いないのではないか?!

ちなみに、太宰府の南約 1.5k m には、「小郡おごおり官衙かんが遺跡」といわれる掘立柱建築物跡、さらには、太宰府の北西約 16k m (福岡市中央区城内)には、「鴻臚館こうろかん→筑紫館つくしのむろつみ」もあるわけである!前者の「官衙かんが」とは、役所の意味であるが、7世紀中頃から8世紀後半までの3期と、それ以前のもの(1~2期)を併せた複合遺跡であるらしいが、規模が異常に大きく、単なる地方役所跡とは思われないらしい!

また、後者は、外国使節を迎える客館、すなわち迎賓館であるが、一国の首府の機能としては欠かせないとされるものである。しかも、近年の発掘調査で、そこと太宰府とが、幅 2 m 深さ 1 m の側溝が両側に完備された、幅員 10m の一直線の道路で結ばれていたことも確認されているらしい!アジア大陸につながる国際道路とも言えるが、遅くとも 700 年代末には、既に廢道になっていたということである!

ということで、「太宰府」は、少なくとも 701 年(大宝律令制定→実質的な「九州倭国(本家?)」の消滅=「近畿大和(倭)→日本国の成立」)までは、倭国全体の「首府」であったということであるが、「記紀」編纂側(持統・藤原体制)は、そこにルーツはあったものの(かろうじて、その皇統を受け継いでいる?)、そのプロセスが、極めてあくどいやり方であったために、そのことを、まともには記せなかった?

否、絶対に、それは、隠さなければならない事実であった?!だから、その後継勢力ではあったものの、逆に、「邪馬台国(卑弥呼・台与)」についても、直接示すことは出来なかった?!そしてまた、それに関わる(ある意味、正統の?)後継勢力のことについては、暈したり、はぐらかしたり、捏造したりして、その存在と活躍を闇に葬ってしまった?そういうことかと思われる?!そしてまた、そのように受止めれば、「記紀」等の矛盾は、ほとんどなくなる?!

とは言え、その矛盾の内実を、まさに整合的に説明出来ないのが、現時点の私なのでもあるが、その鍵を握っているのが、繰り返しになるが、件の「三沼君(→筑紫君?)氏」の存在(その動きと関連氏族の関係)であることは、ほぼ間違いなく、今後は、その具体的な実相を、いかに解明するかであることは言うまでもない?!とりわけ、そこでは、「三沼君(→筑紫君?)氏」と「神功皇后・武内宿禰系諸族」の関係の解明が、大きなポイントであることは、これもまた、言うまでもないことである?!

⑥ 「物部氏」「葛城諸族（蘇我氏）」（筑紫倭国？）、そして、一方の「息長氏」「秦氏」（豊国倭国？）が、第三の山（謎の塊）をつくった?!

さて、そうすると、改めて、その「（筑紫）倭国（大倭→倭たい国？）」は、一体どのような氏族・勢力が関わり、再編統治（建国？）していたのかということになるが、例の倭王「武」が、それに関わっていたとなると（正確には、彼の先祖達が成し遂げていた？←宋への「上表文」!）、当然、それは、いわゆる「倭の五王」の勢力ということになる（4世紀以降の、いわゆる「応神」勢力?）?!

そして、その「倭の五王」の勢力は、基本的には百済系（王族?）と考えられるので、彼らが、そこから版図を広げ、北部九州と近畿大和に「二つの倭国（三つか?→河内倭国?）」を創り出し、「記紀」は、それを、九州での「神功皇后+武内宿禰」の動きと、その後の「応神（→河内王朝）」勢力の、近畿への移動として描いていることになる?!

しかも、それらの事績に、「三沼君氏→筑紫君氏?」（それ自体か?）、そして、「息長氏」や「秦氏」（豊国倭国?）が絡んでいたことは間違いのないことである?!何故なら、その後の「継体」王権（→後の「持統・藤原体制」につながる!）は、そこから生まれているからである?!したがって、まさにそこに、「第三の山（謎の塊）」が形成されているということでもある?!

そこで、もし、そうであれば、「記紀」が示す史実?、そしてまた、それを元にしたこれまでの通説を、新たな真相解明に向けて、いかに超克していくかということになるが、これらの仮説（+妄想?）の展開に当たっては、九州（筑紫+豊国）倭国の「物部氏」、そして、そこから派生した?「蘇我氏（上宮王家）」が、7世紀前後?に、近畿大和（飛鳥地方）に移動し、後に「日本（国）」と呼ばれる、もう一つの「倭国」（近畿倭国）を樹立させたということ、いかに解明していくのかということにもなる?!

そして、その中で注目されるのが、一方で、それに協力（主導?）したのが、同じく九州にいた「息長氏」や「秦氏」ではなかったかということである?!すなわち、「息長氏」や「秦氏」（の主力?）は、いわゆる「磐井の乱」を境にして（否、それ以前に移動していたかもしれない?）、近畿方面に移動（進出）していた（前者が「琵琶湖東岸」、後者が「山城方面」を根拠地として?）?!

ちなみに、「秦氏」は、「息長氏」と行動を共にしながらも、特に「蘇我氏（上宮王家）」の大和移動（進出）に助力し、その後の「倭国→日本国」の成立に大いに寄与した?!そして、その原動力が、彼らのもつ経済力とネットワーク力であったことは、彼らの拠点、後に「太秦<sup>うづまさ</sup>」と名付けられたことから、容易に推察されることであろう（その逸話は、つとに有名である!）?!

しかるに、これらに関わっては、例えば、豊前の「香春神社」（香春岳周辺）と「宇佐神宮」、そして、「宇佐神宮」と「宗像大社」の関係が、大きくクロー

ズアップされてくる?!そして、それらは、それぞれ「息長氏」(新羅系の製銅・製鉄集団)、「宇佐氏」(事実上は、百済を経由した?「秦氏」?)、「宗像氏」(事実上は、伽耶ないし百済から渡来した「三沼君氏」?)の拠点であったわけであるが、その三社の関係は、まことに緊密であった?!

すなわち、それらの相互の関係性から(例えば「香春神社」と「宇佐神宮」の間では、ある祭祀の際に、前者で鑄造された「鏡」が後者に奉納されるとか、「宇佐神宮」と「宗像大社」の関係では、前者の祭神(の主神?)が、「宗像氏」が奉斎する「三女神←比売大神」とされているとかである!)、「宇佐」を根拠地(前線基地?)とした(九州→事実上は「豊国」)倭国勢力の、「瀬戸内海航路」の掌握、そして、近畿・大和への進出といった構図が、くっきりと浮かび上がってくるのでもある?!

だが、そうなると、他方での問題は、「(筑紫)倭国」と「出雲(王国?)」の関係であり、いわゆる「日本海航路」でつながっていた勢力・諸族と「瀬戸内海航路」で、新たにつながった?勢力・諸族との反目・抗争(集散離合)のプロセス(内実)がいかにあっただかということになってくる?!多分それは、主として「鉄」の所有・分配に関わる動きであったろうが、実は、その最初の大きな画期(要因)となったのが、「魏志倭人伝」にある「倭国大乱」であったろうことは、言うまでもない(すなわち、そこでは、それまでの勢力関係を、ある意味根底から覆す、諸族・勢力のシャッフル化が起こった?)?!

しかも、それは、九州での「邪馬台国」の出現に関わるだけではなく(むしろ、それは、その「大乱」の、北部九州での様相(結果)であり、事実、それらを示す「東からの勢力→前方後方墳勢力」の九州進攻の痕跡もある→例の「吉野ヶ里遺跡」!)、西日本、否、東日本をも巻き込んだ大変な動乱であったわけである(これについては、藤井耕一郎氏の、吉備から出発した「手焙形土器/前方後方墳(火?/太陽・龍王信仰勢力)」の動きの解明が大いに参考となる!)?!

とは言え、その「倭国大乱」の初源地(出発地)は、近畿大和の「纏向遺跡」に、その影響痕跡を大いに残す「吉備」であり(鉄の所有・分配で一番不利を被っていた?)、その勢力が、まずは「出雲」、そして「播磨」「河内」「丹波」「越」「東海」「関東」へと進攻?し、一方で、ある一群(後発か?)は、「河内」から「大和」へと移動し、彼らは、全体としては、その後、「東海」、「関東」へとも動いていった(→「氷川神社」あるいは「鹿島神宮」「香取神宮」等?)?!

さらに、その一部(「神八井耳」勢力→「多氏」)は、踵を返すように、西の九州方面にまで進攻していった!そして、彼らは、「火(肥)君」「阿蘇君」「大分君」等となった(ひょっとしたら、「筑紫君氏」も?)?!そうしたプロセスが、後の「大和朝廷」の成立に大きく関わっていた(それそのもの?)ということであり、「記紀」は、その内実を、かの「神話」という形で描写(示唆?)し

ているのではないかということでもあるが、実は、そうした、後に整えられた「神話（ストーリー）」の原形（出所？）は、おそらく「息長氏」や「秦氏」（そして、「加茂（直）氏」も？）のものであった（彼らが、最初に、「記紀」の原形のようなものを創り上げていた？）？！

しかるに、「記紀」（の編纂者達）は、その原形（元話）を、自らの思惑や利害関係によって変形・加工（換骨奪胎？）し、時の最高権勢者であった「持統・藤原不比等」にとって都合のよいものにした？！だからこそ、改めて、そのプロセス（内実）に関わるとされる「息長氏」、「秦氏」（「加茂（直）氏」や「三沼君氏→筑紫君氏？」も！）の動勢が気になってくるのである？！

だが、それにしても、筑後地方の「三沼君氏→筑紫君氏？」と、ある時期同じ圏域にいたと思われる「葛城諸族→武内宿禰系諸族」の関係が、一方で問われてくるわけでもある！しかも、それは、当然、「邪馬台国（連合）」のその後ということにもなるが、「筑紫（筑後）」と「筑前」の関係ということにもなる（多分？筑後地方が、当初の「筑紫」の元となっている？←宮島正人氏）？！さらにまた、そこに、以前にも述べたように、「伊都国（怡土国）」も絡まってくるのである（そこには、「天日矛」や、その後裔を名乗る「五十迹手いとで」→「怡土県主いとのあがたぬし」の祖。筑紫に行幸した「仲哀天皇」と「神功皇后」を出迎え、「伊蘇志いそし」の名をあたえられた。それがなまって、「伊覩（→伊都）」になったとされる？）？！

そして、そこには、「加也<sup>かや</sup>山」（山頂には、神武天皇を祭る「可也山神社」あり）、そして、「高祖山<sup>たかすやま</sup>」（古代の怡土城跡）もある！改めて、そこに、「伽耶・新羅系勢力」の存在（進出）が見て取れるのである？！彼らは、おそらく「息長氏→神功皇后」や「武内宿禰系種族」とオーバーラップされていると思われるのでもあるが、要は、「伊都（イト→イソ／イセ？）」は、かなりの鍵（謎？）を有しているということでもある？！

そしてさらに、そこは、「素戔嗚命（→天日矛？）」や、その子とされる「五十猛<sup>いたける</sup>神」の上陸地とも考えられるのである？！しかも、そこは、「朱丹（辰砂）」の生産地（集積地？）でもあり、そしてまた、後の「三種の神器」の原形と考えられる、「鏡」「劍」「玉（勾玉）」のセット的出土もあり、ひょっとしたら、ヤマト王権の源郷とも考えられるのである？！

彼らが、具体的に、どこから渡来してきたのかは、まだまだ判然とはしないが（半島から直接か？それとも、出雲を経由してからか？いずれにしても、元々は半島からの渡来系であることは、彼らの、渡来逸話からも明らかである？）、そこにある大きな史実？が、実は、「第二の大きな山（謎の塊）」、そしてまた、「第三の大きな山（謎の塊）」を成していることは、改めて言うまでもない？！それらが形成される前までの「弥生期」の状況、そして、大陸や朝鮮半島との地理的關係を踏まえれば、そのことが重要な史実？として確認されるのである？！

⑦「葛城氏（諸族）」と「息長氏（諸族）」の近畿移動、しかもセットで？では、いつ頃、どのように？

さらに、もう一つ、ここでは新しい情報（事実？）となるが（あるネット情報による！）、件の「伊都国」の南の「背振山系（南麓）」に蝟集していた？「葛城氏（諸族）」のことが、改めてクローズアップされてくる！そしてまた、その「諸族」と、例の「貴（木／基肆）国」（新羅系？）との関係（つながり）も気になってくるのである！

それは、どういうことかということ、端的に、ある時期に、「葛城／息長系諸族」が、「伊都国」の南の、佐賀県の背振山系（南麓）に居たということであり、それが、『日本書紀』に記されている、「百済の王、東の方に日本の貴国有ことを聞て、臣等遣て其貴国に朝でしむ」の「貴国」であれば、ある意味とんでもない史実となるからである（従来は、「貴国」は、「日本国」の尊称と解され、別の国の存在としての認識もないか、すこぶる曖昧にされているのでもある？）？！

すなわち、その旧背振村には、「桂木」という場所があり、そこに「一言主命神社」、さらには、「長江」という地名もあり、そうなれば、そこに、例の「武内宿禰」の子の一人「葛城長江ながえ襲津そつ彦」（「葛城氏」の直祖？）が思い起こされるのである？！そしてまた、そこには、新羅系の「息長氏」につながる？「伊福いふく（伊吹？）」という地名もあるということである！しかも、その地には、「踏鞴たたら製鉄」の痕跡もあるということである？！

そして、さらにまた、驚くなかれ、それらに加えて、その二つの氏族（葛城氏／息長氏）は、その佐賀県の脊振山系から福岡県うきは市の「耳納みのう山系」へと移動しているように見えるということでもある？！例えば、「巨勢こせ川」という名の川が佐賀市を流れているが、同じ名、同じ表記の「巨勢川」が、うきは市から久留米市を流れて、筑後川に注いでいるということである！

また、通説では、「神功皇后」の一族（息長氏）は、近江（琵琶湖東岸）にいたとされるわけであるが（事実、敏達天皇妃の「息長広姫」の陵墓などは、滋賀県長浜市の「姉川」沿いにある。ただ、それは、まだ後の時代の事であるが？）、佐賀県神埼市（佐賀市の東隣で、「吉野ヶ里遺跡」に隣接する）と福岡県うきは市には、近江にある「姉川（地区）」と「妹川（地区）」という河川名、地名が存在しているということでもある（ただし、「姉川」地名は、肥後の「菊池氏」の分流が肥前へ展開し、現地の姉川地名を称したものともされるらしいが？）？！

ちなみに、後者のうきは市には「妹川地区」があり、「伊福」という鍛冶屋も沢山住んでいたということである（彼らが、滋賀県の「伊吹（伊福の置換え？）山」と関係があることは明らかである？）？！

しかるに、北部九州と近畿に、いわゆる「二つの倭国」が併存していたということを、我が国古代史解明の核としている私であるが、それは、まったく別々

の氏族・勢力がなしていたものではなく、同族ないしは関係の氏族・勢力による、言わば「相互越境的な」関係の中で成立していたということが、その骨子であるわけであるので、上記の情報（史実？）は、その思いに、さらに拍車をかけるわけである！

改めて、彼らは、大きく分けると、時代順的には、「江南系」「伽耶・新羅系」、そして「百済系」の諸族であり（ただし、彼らは、言うなれば「渡来系倭人」と総称できる？）、その内部関係の中で、集散離合を繰り返していたということであるが、「葛城／息長系諸族」も、その中の一つであるわけである？！

そして、その後？、香春岳周辺に移動していた「息長諸族」（→「英彦山」（秦王国？）→新羅系！）と、上記の「葛城諸族」が、ある時期にタッグを組んだ？そこに、同じく「新羅系（辰／秦韓）？」の「秦氏」も加わった？そのように理解されるのである？！

こうした中で、「物部氏」や「秦氏」の、北部九州と近畿双方の地域における蝟集的存在の事実（前者は北九州比企郡部と河内地方、後者は豊前地方と播磨／山城・太秦地区等）は、現在の地名等にも残されている？！したがって、それらの氏族・勢力が、どのように行き来（移動・進出）していたのかという事実の解明が、当然必要となってくるということである？！

そして、他の関係氏族・勢力についても、なかなかその実相が掴めないものであったが、上記のように、「葛城氏」（大和葛城山麓）や「息長氏」（近江琵琶湖東岸地域）については、その移動（進出？）の状況が、新たに分かるということである（その逆の動きの可能性もあるが、常識的にみて、それはあり得ない？）？！しかも、その両氏は、ある意味セットで移動（進出？）したのではないかということでもある？！

一方、これについては、さらなる情報となるが、佐賀県の脊振山系には、「野波のなみ神社」（旧三瀬村）という神社があり、その祭神が「息長宿禰」と「葛城高額たかぬか姫」とされ、その神社の「下の宮」が、かの「神功皇后（息長足姫）」を祭神としているということである（神功皇后は、両者の娘！）！まさに、そこにも、「息長氏」と「葛城氏」のセット的存在が見て取れるのでもある！

しかも、その息長一族は、現久留米市田主丸町一帯にも拠点を持っていたようであり、さらにまた、その神功皇后（息長足姫）の母親とされる「葛城高額比売命」を祀る「一言主神社」が、旧三瀬村の東隣の旧脊振村（現佐賀県神埼市）の「鹿路ろくろ」という集落にもあるということなのである（バス停名は「桂木」）。そして、実は、この地は、昔は「高良こうら？」と呼ばれていたということでもある？！

そこで、その「高良」と言えば、例の、久留米市の「高良大社」ということになるが、これに対応すると思われる「高良神社」（祭神：武内宿禰）が、こ

れまた、驚くなかれ、滋賀県の彦根市にもあるということである！また、その滋賀県には、高良の置換えと思われる「甲良こうら（町）」もあるということである！

さらにまた、そこには、「甲良神社」（「天武」の後の「尼子姫／宗像徳善の娘」の勧請という。祭神は「武内宿禰」。相殿に「宗像三女神」がいる！）がある上に、隣の「豊郷町」には、「安自岐あじき神社」（祭神：「味鋤高彦根あじすきたかひこね」→「安自岐氏」←高貴な百済系渡来人 cf. 王仁氏）を持つ「安食あじき」という地区もあるそうである（ということは、そこに、「鴨族」が関わっていたということでもある?!）！

つまり、「高良」と「甲良」が対応しているだけならば、もちろんそれでいいのであるが、この甲良町の隣の「安食あじき」の「阿自岐」まで揃っているとすると、そこは、どう考えても、「高良大社」のある、久留米高良山の麓に居た「阿自岐の一族」が移動した痕跡地名であることは、疑いようのない事実であるということである?!

しかも、かの「太宰府」にも「阿志岐」という地名があり、古代、有明海が久留米市の北側まで大きく入っていた 1500 年前頃までは、高良大社の南麓までが、「阿志岐」であったと言われているらしいのである?!

他にも、同じような地名対応もあるらしいが（糸島市前原と米原（旧脊振村）、そして、滋賀県米原市）、このことは、他ならぬ「息長氏」が、当該の地に居た？または、そこから移動していった勢力であることを示している（他にも、播磨・吉備等にも、「息長」を名に持つ関係者がいたようである？）?!

ちなみに、その後の、「息長氏」の根拠地（琵琶湖東岸）は、美濃・越への交通の要地であり、「天野川」河口にある「朝妻津」により、大津・琵琶湖北岸の「塩津」とも繋がっている。また、そこには「息長古墳群」があり、相当の力をもった豪族であったことは間違いない！なお、「息長」の名義発祥の由来は、上古から持つ製鉄・鍛冶に関する技術から生じたとみられる?!

しかるに、その「息長氏」は、「記紀」によると、「応神天皇」の皇子「若野毛二俣わかぬけふたまた王」の子・「意富富杼おおほど王」を祖とするとされているが、それと関連する「山津照やまつてる神社」の伝によれば、彼らは、「国常立くにのたち命」を祖神としており、皇室との関わりを語る説話も多いようである?!だからこそ、「息長氏」は、天武の時代の「八色姓やくさのかばね制」で、最高位の「真人まひと姓」が与えられたのでもある（同族の「三国公→三国真人」／「坂田公→坂田真人」／「酒人さかひと公→酒人真人」もである!）?!

以上のように、「葛城氏（諸族）」と「息長氏（諸族）」の関係は、そのセット的移動を含めて、重要な関係にあり、そしてまた、それが、件の「応神天皇」の存在と活躍に直結しているのでもある?!

⑧ 次が、第一の山（謎の塊）？「邪馬台国（連合）」前後の「倭国（種）」の実態（実体？）?!「安曇族」の全国展開（海洋交易）と「(倭) 奴国」のその後?! 次に、ここでは、改めて、第一の山（謎の塊）？「邪馬台国（連合）」時代の「倭国（種）」の実態（実体？）について、押さえておきたい。すなわち、そのことは、ある意味？「倭国大乱（180年頃）」前後の実相ということになっていくわけであるが、それが、全国各地に大変動をもたらし、その後の倭国（→日本国）の推移の大いなる下地をつくったことは、間違いないからである（その「倭国大乱」は、北部九州だけでなく、西日本、そして東日本へも及んでいた?!）?! 要は、そういう中で、「吉備」からの「手焙形土器（前方後方墳）勢力→ワニ族／多氏？」の東西移動（環濠集落勢力「安曇族？」／「奴国」勢力への攻撃?）、そして、そこから、次の？「前方後円墳勢力（物部族?）」が出てきたということであるが、そうした動きは、件の「倭国大乱」の一環（その結果の一つ?）として繰り広げられたもので、そのような動き（大変動）が、具体的には、どのようなものであったのかということである！

そして、それらが、おそらく、「素戔鳴命の出雲降臨（進出）」、「大国主命（出雲）の国づくり→譲り」、「天孫降臨」、そして、「神武東征」という、いわゆる「記紀神話」の元ネタとなっているのではないかということである?!

ちなみに、ここでは、少し話は飛ぶ?（時代的には戻る!）が、件の「邪馬台国（連合）」以前の北部九州では、「(倭) 奴国」が、「倭人社会（国家?）」の中心であったことは明らかである（漢委（倭）奴国→AD57年に、後漢から「金印」をもらった!ただし、国名の解釈の違いがいくつかあるようであるが?）!

しかるに、その「委（倭）奴国」は、いわゆる「江南系（呉越）」の国であった（『後漢書』等から、そう判断される?）!そして、その王都?は、おそらく最初が室見川流域の「吉武高木遺跡」（「早良王国」）、次には春日丘陵の「須玖岡本遺跡」辺りにあったことは、ほぼ間違いないであろう（ただし、その双方は、違う部族集団であったかもしれない?）?!

そこで、改めて、その「委（倭）奴国」を含め、まさに「邪馬台国（連合）」時代の「倭国（種）」の実態（実体?）は、果たしてどうなっていたのかということであるが、当然、それは、いわゆる「海神（綿津見）族」の頭領?「安曇族」の全国展開（海洋交易）と、そこにおける「委（倭）奴国」のその後ということになる?!

とにかく、彼らは、海洋交易民（海人族）であったことは事実であり、その海洋交易の海の前線基地が、「志賀島」（金印発見地／「志賀海神社」）であったことも、これもまた事実であろう?!そこで、ここで注目されるのが、その志賀島の「海神わたつみ／綿津見神」のことである!すなわち、その「海神／綿津見神」とは「安曇あずみ族（氏）」の奉斎する神であり、その「安曇族（氏）」が、

全国各地（東北地方まで？）に、「あずみ（あつみ）／あど」等の名前を残しているのであるが（「伊勢湾沿岸」、「琵琶湖西岸」、そして、「信濃（安曇野地方）」が有名である！また、「しが（しか）」という名前も、「近江」、そして「信濃」に残している！）、これらが、どのような経緯を有しているのかである？！

例えば、それは、単なる「安曇族（氏）」の全国展開（海洋交易）を示すものであるのか？それとも、あるきっかけ（争い？利害衝突？）で、他の地域への積極的な移動（移住、拡散？）を余儀なくされたものであるのかということである（しかも、このようなことは、同じ海洋交易民？の「鴨族（氏）」についても言える？→全国各地に、「鴨（賀茂／加茂）」の名前を残している！）？！

とにかく、その双方の要素があるのかもしれないが、そうした移動（移住、拡散？）の事実が、その後の「委（倭）奴国」の行く末とも関わって、実に大きな意味を持っていると思われるのである？！と言うのも、実は、AD107年に、後漢へ朝貢したとされる倭国（倭面土わめど？国？）王「帥升<sup>すいしょう</sup>」等が、その「委（倭）奴国」の、通常の（正統の？）後裔勢力であったのか？それとも、その後の「倭国大乱」をもたらした、新たな勢力であったのかどうか？その違いによって、その後の「倭国」全体の状況把握が、かなり異なったものとならざるを得ないのである（100余国→使訳通ずるところ30余国）？！

ただし、このことについては、例の「魏志倭人伝」によれば、いわゆる「邪馬台国（卑弥呼）」の出現以前には、当地は、70～80年間男王が統治していたということであり、おそらくこれが、その「帥升」王の系統とも考えられる？！そして、それがまた、素戔鳴命の話に投影されているとも考えられる？！

なお、ここでは、「邪馬台国（連合）」と敵対していたとされる「狗奴国」との境界？に、「もう一つの奴国」があった？！ひょっとしたら、それは、例の「（倭）奴国」の一員（協力者？）であった「隼人系？」の国（海洋交易の中継地→玉名地方・菊池川河口？）の可能性も、視野に入れておきたい（→二つの「奴国」は存在した→江田船山古墳／前方後円墳（銀象嵌銘鉄刀出土））？！

そこで、もしそうであれば、そのことが、件の邪馬台国（連合）の出現（2世紀末？）に、どのように繋がっていくのかという、（九州）倭国初期の謎？に大きく関わるということであるが、これについては、「邪馬台国（連合）」期においては、かつての覇権国家？「委（倭）奴国」の存在が、かなり軽いものとなっていることは明らかであり（人口は多いが！）、一方で、その西隣の「伊都国」の存在が大きいものとなっていることも明らかである（そこには、代々「王」がいたが、その後？女王国に統属され、そして、「一大率」の常駐となり、諸国が畏怖していたということであった！）！

したがって、これまではあまり注目されていなかったようであるが、「伊都国」という、まさに「好字」で表記されているということも、ある意味不思議

であるが（他の諸国は、基本的には「卑字」が当てられている?!）、その伊都国と「邪馬台国」の関係が、改めてクローズアップされるのである?!端的に、「伊都国」と「邪馬台国」が協力して、大国「委（倭）奴国」の覇権を奪ったということが考えられないかということである（「一大率」の常駐は、それを如実に示している?!）！

ということで、もしそうであれば、これについても、改めて大変な史実?ともなるが、そうした「伊都国」の勢力（主力?）が、例えば「朱丹（硫化水銀）」あるいは「銅」、さらには「鉄」を求めて?、内陸部（九州中部?）の邪馬台国に移動したとも考えられ、伊都国の「太陽信仰」、あるいは「卑弥呼」の鏡好き?というような話にもつながっていくようにも思えるのである?!

また、その「伊都国」については、「いと（こく）」なのか、「いつ（→せ?）（こく）」なのか?それとも「いど（こく）」なのかという問題もあり（ただし、その後、その地域は「怡土（郡）」と呼ばれたので、原音は「いど」または「いと」だった?そして、後世（～現在）の「糸島（郡）」は、「怡土」と「志摩」の合体表記となっている!）、さらに、それに関わる伊勢湾岸の「伊勢・志摩」のセット的存在、そして、そこにおける「磯部（いそべ←いせべ←いとべ?）族」の存在と関わらせれば、両地方の関係は、俄然注目されるものともなる（彼らの後裔の「渡会氏」等が、かの「伊勢神宮」の創始者であったことも間違いない!）?!

さらにまた、紀州（和歌山県）の「伊都<sup>いと</sup>（郡）」の存在も気になってくる（そこには、例の「人物画像鏡」がある「隅田<sup>すだ</sup>八幡宮」（橋本市）、あるいは「朱丹」と関係がある「丹生津<sup>にゅうつ</sup>姫神社」等もある!）?!そしてまた、その対岸にある「海部<sup>あまべ</sup>（郡）」の存在は、「豊後」、「阿波」、「若狭」と共に、「海部族（海部氏）」の進出先を示唆するものでもある（そこには、同じ「海部郡」がある!）?!

いずれにしても、ここで改めて、「邪馬台国（連合）」時代の「諸国」の実態（実体?）についてであるが、要は、その時代までには、少なくとも、北部九州の「倭国（→「邪馬台国（連合）」）」と、それ以外の「倭人（種）の国」が、それぞれ関係を持ちながら、幾つか出来上がっていたということである?!

例の「魏志倭人伝」は、その中の、北部九州の「倭国」（邪馬台国（連合））についての情報ということであるので、その全体的な状況は分からないのであるが（「魏」と、冊封国の「倭国」（邪馬台国（連合））との関係の中での話であるので、当然である!）、「吉備」や「出雲」、そして、「播磨」や「河内」、「近江」「丹波」等にも、そうした「クニ→国」が出来つつあったということである?!

さらには、「信濃」や「関東」にも、そうしたものが出来つつあった（「穂高見国」や「扶桑国」等?）?!そして、それらが、まさに「倭国大乱」前後に生じたものであれば、その動きは、おそらく「倭（委）奴国」の人々の東方移動の結果と言えるのかもしれない?そういうことである?!

⑨「安曇族」と「カモ（鴨／賀茂）族」の東方移動?!おそらく、彼らが、「倭国→日本国」への最初の契機（原形）をつくった?!

ところで、以上のような、「邪馬台国（連合）」の出現前後（2世紀末?）における大変動は、海洋狩猟民／海洋交易民であった二つの部族、すなわち「安曇族」と「カモ（鴨）族」がもたらしたことは、ほぼ間違いないであろう?!彼らは、全国各地に拡散・進出し、それぞれの根拠地・ネットワークをつくり、その後の「倭国→日本国」への契機（原形）をつくったのである（各地に散在する「あずみ（あど）／あつみ」「しが／しか」、「かも」等の名!「なか」もある?!）?!

そして、彼らは、双方ともに、いわゆる「黒潮」に乗ってやって来た「江南系」の倭人（渡来系弥生人?）であった?!前者が北部九州（対馬海流沿い／日本海側）、後者が南部九州（黒潮本流沿い／太平洋側）への渡来ということであろうか?!誠に大胆な推理（妄想?）と言われるかもしれないが、少なくとも、かの「神武東征」のモチーフ（枠組み）から類推すると（「宇佐」で合流したように見える?）、このような出会い・動きが考えられるわけである?!

すなわち、北部九州の「安曇族」と南部九州の「カモ（鴨）族」が、何らかのきっかけ?で、瀬戸内海入口で合流し、「吉備」を経て（そこで力を蓄えて?）、近畿・大和へ移動・進出したということであるが、その「神武東征」のストーリーは、まさにそうした史実?から生み出されたものではないかということでもある（まったくの空想では、そうしたストーリーは創り出せない?）?!

なお、そこでの「安曇族」が「ワニ族（和邇氏／多氏／三輪氏等）」であり、いわゆる「海神わたつみ」、そして、「カモ（鴨）族（賀茂臣・朝臣氏／賀茂直氏等）」が、文字通り「カモ（鴨）」（※古語では「あじ」?）である?!ただし、「海神わたつみ」と対比される、もう一つの「山祇やまつみ」が、後者の「カモ（鴨）族」なのか?それとも、「物部ものべ族」の「火明ホアカリ or 饒速日ニギハヤヒ系」（物部氏／尾張氏／海部氏等）なのかは、今のところ、よく判断がつかない（ただし、後者は、後から入ってきた「伽耶・新羅系」あるいは「百済系」の集団ではある?）?!

ちなみに、同じ海洋系倭人と思われる「住吉族」（→津守氏）は、いわゆる「隼人系」と考えられ、以前から「安曇族」と行動を共にしていたが、「応神」の頃独立?して、瀬戸内海航路を掌握していた?!というより、「応神」と組んで、東進していた（淀川河口・住吉地区）?!だから、「記紀神話」では、「ホスセリ（海幸彦）」として、「ホオリ（山幸彦＝ホホデミ）」の兄に位置づけられた（そして、件の「ホアカリ」は、一番下の弟とされた!）?!実は、ここに、我が国古代史の大きな枠組みが示唆されているということでもある?!

いずれにしても、弥生期から古墳時代期にかけての我が国（倭国）の混乱と変貌のプロセスは、こうした「海人族（海洋系倭人）」の全国展開と、それぞれの部族・勢力の移動・進出、あるいは離合集散のプロセスでもあるということ

である?!そして、その大きな舞台が、北部九州であり、出雲・吉備であり、近畿・大和であったということである?!

もちろん、それらは、中南部九州、そして、丹波、越、信濃、東海、関東等にも及び(多分、韓半島南部にも?)、まさに、「邪馬台国(連合)」の解体(消滅?)後の3~5世紀の我が国(倭国)の状況は、そうした枠組みの中で、理解されなければならないということである?!

ただし、先の「カモ(鴨)族」には、2つの系統(途中から分かれたということか?だが、備前の「賀茂氏」を加えれば、三つとなる!)があることは、ここでは押さえておかなければならない?!すなわち、一つは、大和国「葛城かざらき」の「賀茂氏」(「葛城賀茂氏」=「賀茂造氏」等)。彼らは、「大国主命(大物主神?)」の子孫「大田田(直)根子おおただねこ」の後裔の「大鴨積/大賀茂都美おおかもつみ」を祖とし、「三輪みわ氏→大神おおみわ氏」と同族とされている。これは、おそらく、「出雲(「意富/意宇おお」)」と関係しているであろう?!

もう一つは、山城国「葛野かどの」の「賀茂氏」(「賀茂直氏」等)で、神武東征で、重要な働き・水先案内をしたとされる「八咫鳥やたがらす(カモタケツヌミ命)」を祖とする「葛野主殿県主かどのとのもりあがたぬし」系である。彼らは、後に「秦氏」と姻戚関係を結んで、大いなる権勢を振るった(→「上賀茂神社」/「下鴨神社」等)!しかし、彼らは、「吉備」を根拠地として(経由して)、近畿・大和に移動した部族であることは明らかである(例の「手焙形土器=前方後方墳勢力」の出発地である「吉備」には、件の「賀茂/鴨」の痕跡が色濃く残っている!→「賀茂西遺跡」/「賀茂遺跡」)?!

ということで、最初の「近畿・大和」の政権勢力は(一つのまとまった「国」ではないが?)、西から移動していった「安曇族(→ワニ族)」と「カモ(鴨)族」、そして「物部族」であったということになるが、最後の「物部族」は、おそらく、少し遅れて大和に入った「太陽信仰族」で、後に彼らは、「ホアカリ系」と「ニギハヤヒ(→ウマシマデ(ジ))系」に分かれた?!

そして、これも、おそらくではあるが、「吉備」に移動していた「安曇族(ワニ族)」は「意富氏」で、彼らは、「ワニ→龍神信仰族」であった?また、彼らは、「神八井耳命」の後裔とされる「多氏」であり、例の「大彦」も、その系列ではなかったか?!

ちなみに、東海・関東に見る「手焙形土器(前方後方墳)勢力」と「銅鐸(環濠集落)勢力」の攻防(前者による、後者の駆逐?)、そして、そこにおける、「太陽信仰(前方後円墳)勢力→物部族」の三つ巴の様相は、例えば武蔵国の「氷川神社」、あるいは常陸の「鹿島神宮」(タケミカツチ→中臣氏※ただし、本来は「多氏」のもの?)や下総の「香取神宮」(フツヌシ→物部氏)の地勢的配置等によって、ある意味容易に推測されるものとなっている?!そして、そこでの「手

焙形土器（前方後方墳）勢力」が「大彦命」、「太陽信仰（前方後円墳）勢力」が「武渟川別<sup>たけぬなかわわけ</sup>命」を示している（例の「四道将軍」の二人として?）?!そして、それは、そのまま、「倭国→日本」へと変貌していった、我が国の古代国家建設の、ある意味「縮図」ともなっている?!

すなわち、「崇神」による「四道将軍」の派遣、とりわけ、ここでは「大彦命」と、その子「武渟川別命」の東海・北陸・関東（一部東北まで!）への派遣話は、こうした、「渡来系」の人々の開拓（進攻?）話が、元になっているということである?!ただし、前者は、日本海側から、後者は、太平洋側からの進出の話と考えられる?!そして、そこでの覇権争いは、勢い近畿・大和の勢力構図を、大いに左右したものと思われる?!

参考までに、そこには、いわゆる高句麗系の人々の足跡も、同時に見られる!「高麗<sup>こま</sup>（川）」等の存在であるが、もちろん、当地は、開拓の余地がふんだんにあった地であったろうから、様々な人々、とりわけ「渡来系」の人々にとっては、まさに「新天地」であったわけである?!

それはともかく、ここで少し確認しておきたいことは、北部九州のことはともかく（関係はしていると思われるが!）、渡来系の人々の動きとして、中国山地の人々（「四隅突出型墳丘墓」を残している部族?まずは、三次地方から!）の出雲支配?の事実を、どのように受け止めるかである（その最盛期は、出雲西部の「西谷墳丘墓（3号墳）」?!東部の「意富（意宇）地域」（安来地区）と西部の「神門地域」（出雲地区）、これが、「意富」氏の支配地域であり、そこから分枝?した「出雲臣氏（出雲国造）」が、かの「出雲大社（杵築大社）」を奉斎した?!

そして、そのことが、例の「素戔嗚命」の出雲降臨と、その後の「大国主命」の「国づくり」、そして、天孫族への「国譲り」の話と連動しているのならば、その「四隅突出型墳丘墓」勢力が、「素戔嗚命」の出雲降臨に投影されていることになる?!ただし、「四隅突出型墳丘墓」は、もともと高句麗の地が発祥ともされるようなのであり、そうなれば、「意富（多）氏」は、そもそもが「扶余系」の氏族だったということも考えられる?関東の、「高麗（川）」等の地名は、それとの関係でみれば、さらによく理解できることとなる?!

しかし、いずれにしても、彼らと、「吉備」の龍王勢力との関係が、そこでは改めて問われてくる?!中国山地の「四隅突出型墳丘墓」の勢力（産鉄族?）には、吉備との繋がりがあったことは明らかであるが（「西谷3号墳」にその痕跡あり!）、では、その勢力は、まずは、吉備の方から、中国山地→山陰（→北陸→能登→富山）へと移動した?それとも、その逆なのか?件の「素戔嗚命（龍王そのもの?）」の出雲降臨（→八岐大蛇退治）のモチーフ等によれば、やはり吉備の方から、進出していったと言えそうではある?!

⑩「吉備」で力を蓄え、「出雲」→「近畿／大和」に移動（進出）した「ワニ（和邇/和珥）族」と「カモ（鴨/賀茂）族」?!

ということで、一方では、それらは、おそらく「天稚彦」と「味鋤高彦根（鴨族）」及びその妹の「下照姫」との関係も、そして、「吉備津彦」と「温羅」（出雲系?）との抗争（「桃太郎伝説」の原形?）、それに関わる「鳴釜神事」「阿蘇女（多氏?）」等の話をも包含しているのではないだろうか?とにかく、ここでは、「吉備」と「出雲」の関係が、改めてクローズアップされてくる?!

そこで、ここで、その辺りの大枠を確かめてみると、とにかく「吉備（足守川流域）」から出立した「太陽／龍蛇信仰族」（鴨?／和珥?／三輪・大物主族?）が、まずは「出雲」に進攻し（→「出雲の国譲り」?）、その後、「播磨」（一部、「丹波」へも!）、「河内」を經由し、一方は、淀川・木津川を遡り、「近江」「越」「東海」「関東」へ（手焙形土器→鴨／和珥族→意富氏→大彦系?→前方後方墳勢力）、そして、もう一方は、大和川を遡り、「大和」へ進出した（三輪・大物主族→物部族→前方後円墳勢力）?!

その後、両者は、（再び?）大和で合流したが、最終的には、後者が、大和を統一した?!その間（あるいはその後?）、前者の前方後方墳勢力（意富／多氏→「神八井耳」勢力?）は、九州方面にも進攻し、「吉野ヶ里」の環濠集落勢力等を駆逐した（おそらく「奴国」も?）?!そして、「邪馬台国（連合）」へも関与した（その後、彼らは、「火（肥）君」「阿蘇君」「大分君」等となった?さらに「筑紫君」も?）?!

しかるに、それらの証拠を示すものが、まさに「手焙形土器（「甕みか」?／火の祭祀用?→第1期／170年頃～第4期／3世紀半ばまで、ほぼ80年間?）」と、その（進攻）後に造営されたとされる「前方後方墳」の出現（彼らの征服の証し?）である!ちなみに、「吉野ヶ里」の環濠集落勢力の駆逐は、第3期（220年頃?）とされている（それは、ちょうど邪馬台国卑弥呼の登場期と重なる?）?!

そして、この場合のこと（のみ?）が、「魏志倭人伝」に言う「倭国大乱」ということになるのかどうかはともかく、その大乱の影響（結果）が、北部九州での「邪馬台国（連合）」の出現と、他方での、近畿大和への「吉備（→出雲）勢力」（→後の「大和／纏向王権」?）の結集は、おそらく間違いないということである?!したがって、問題は、それが、どういう形で進んだのかである?!

ということで、その大きな流れ（足跡）の一つとして、おそらく3世紀半ば頃に（もう少し後か?）、大和で、「物部氏（太陽信仰族?）」から主導権を奪われる「ワニ系氏族」、すなわち海人族を統属する「安曇族」（志賀島を本拠としていた!）の一部（王族?）が、北部九州での乱を避けて、「吉備」へ移動した（逃げた?）?!そして、そこで、船の移動と戦闘の役割を分担するような組織となった?!その後、彼らは、出雲・播磨・河内・近江を經由して、近畿大和の

「唐古・鍵遺跡」の環濠集落等に攻め込んでいった（その際、「足守川流域」で生まれていた「龍王／太陽信仰」を持ち込んだ？）?!

さらに、その一方で、その同じ勢力・集団の一部（神八井耳勢力？）は、その後、「国東半島」経由で、北部九州の「吉野ヶ里」の環濠集落等にも進攻して、「龍王信仰」と「前方後方墳」を九州にも持ち込んだ?!これが、吉備に集中する「龍王山」が、大和（纏向周辺）や豊後地方にも広がっている理由である（このことに関係する「天照御魂神社」の「龍王山と日の出の関係」も、古くからの「龍王信仰」と結びついていた「太陽信仰」と捉えることができる!）?!

なお、「龍王信仰」は「ワニ系」、「太陽信仰」は「物部系」と、大きく分けることができるが、繰り返すように、両者は、本来は（ある時期に!）、吉備の「足守川流域」で力を蓄えていた勢力の信仰形態である?!

ただし、それは、記紀神話の「タケミカヅチ」と「フツヌシ」に対応する「ワニ系氏族」と「物部系氏族」の違いからも明らかなように、前者が、「手焙形土器」と「前方後方墳」の勢力であり、「龍王」の子孫と名乗り、「龍王信仰」を為していた、新たに「近江」を地盤とした「ワニ系氏族」であり、後者は、新たに大和を地盤とし、「太陽信仰」、それ自体に傾斜を強めていった「物部系氏族」であり、彼らは、瀬戸内海の制海権を獲得し、「前方後円墳」を全国各地に生み出していった勢力である?!

そこで、ここで、いわゆる「欠史八代」のことを、こうした「吉備の勢力」の系譜とみると、ある面白い事実?が判明してくる?!つまり、古墳時代以前、出雲地方はもちろんであるが、古大和（三輪地方）にも出雲（神）族がいた!そして、その一族「（意）富<sub>おお</sub>家→和珥氏?」によると（「富家家伝」）、初代から第9代までの天皇は、「（意）富家系」と「倭直系」が交代で続き、初代（神武）～第3代（安寧）は倭直系、不思議?と第4代（懿徳）は示されていないようであるが（母は「鴨族」!）、第5代（孝昭）～6代（孝安）は出雲（（意）富家系?）、第7代（孝霊）は倭直系、第8代（孝元）～9代（開化）は（意）富家系だったという?!

一方、これに関して、初期天皇の皇后は、少なくとも3代連続で「賀茂女<sub>かもめ</sub>」（鴨族の女性）だったともされており（「記紀」では「事代主神」系?）、そうなると、最初の大和王権?は「倭直系」と「賀茂氏（族）」勢力によって現出されたことになる?!そして、「倭直」（→道臣／大伴・久米氏→吉備氏?）は、例の「珍彦（椎根津彦／棹根津彦→塩土翁?）」ともされるので、それは、まさに「神武東征」の軍勢と一致する?!なお、「三輪（大神／意富氏?）」が「（意）富家系」ということになるが、「三輪（大神／意富氏?）」と「賀茂（鴨）」は同族という面もあるので、そのことは、実は、上記のようなことを指すのかも知れない?!

そこで改めて、「賀茂氏(族)」とは、いかなる氏族・勢力(部族)であったのか?!すなわち、その存在(活躍?)、他の氏族・勢力の、彼らとの関わりが気になってくるのである!さらにまた、祭祀に関わる「日」と「火」の関係から、大和(三輪)・伊勢・丹後、そして出雲の関係が浮かび上がってくるのである?!果たして、その実体はどのようなのか?!

例えば、その「カモ族」の始祖?とされる「(カモ)建角身<sup>タケツヌミ</sup>→八咫鳥<sup>ヤタガラス</sup>」は、南九州の「曾」の出身であるとか、あるいは、彼がそのモデルとなっていると思われる?「神武」の東征先の重要寄港地?「吉備」には、「カモ」の名が厳然とある!そしてまた、奈良、京都をはじめ、全国各地に「カモ」の名が残されているが、実は、吉備の「賀茂西遺跡」が、「手焙形土器」(「火」の祭祀用?)の発祥の地(「カモ族」の出発地?)であったようでもある?!

したがって、本来(最初?)の「火」の勢力が、この「カモ族」であった、あるいは、その「カモ族」を中心として、「火」の勢力(→前方後方墳勢力?)が形作られたということであった?!ちなみに、第10代崇神は、第8~9代の(意)富家系と直接の関係があることになり、それは、彼と「饒速日<sup>ニギハヤヒ</sup>」、そして、彼と「トミ(鳥見→富?)の長脛<sup>ながすね</sup>彦」の関係ということにもなる?!一般には、第2代綏靖~第9代開化までは実在とはされていないが(→「欠史8代」)、本当は、初期の「三輪王朝」のことを指しているのかもしれない?!

参考までに、「前方後方墳」「手焙形土器」出現の「2期=190年~210年」「3期=210年~230年」の時期には、「孝昭天皇」系の「ワニ氏」と「孝元天皇」系の「アベ氏」が分岐し、「龍王信仰」を近江に伝えたのはワニ氏である!

いずれにしても、ワニ系の始祖とされる「孝昭天皇」(「手焙形土器」と「前方後方墳」の勢力)、物部系の色合いが濃い「孝靈天皇」(「前方後円墳」の勢力)、アベ系の始祖とされる「孝元天皇」(その子の「大彦」勢力)が、吉備の勢力に連なる系譜の持ち主ということになる?とは言え、それら吉備の勢力は、一体どこから来たのかである(北部九州(糸島?)と南九州(日向?)からか?)?!

そこで改めて、以前私が想定したように、初代「神武」が、後の「応神」の創出?のために必要とされた仮想の天皇であり、そのモデル(ダミー?)が、「カモタケツヌミ(八咫鳥)」であったとすれば、事実上は、彼(→賀茂氏(族))が、実際の(記紀に示された)「神武」の事績を担ったことになる?!

つまり、(南部)九州から、宇佐→(岡=遠賀)→吉備経由で、「東征(実際は移住?)」してきた「賀茂氏(族)」が、大和「葛城」の地で、まずは「三輪氏族」(「出雲(大国主/オオナムチ命)」と結びつけられた?「大物主」勢力)と合流し(→葛城王朝?)、そこに、後から乗り込んで来た「饒速日→吉備(物部?)勢力」と、三輪山(纏向)で大同団結し(三輪王朝、ひょっとしたら「崇神王朝」かも?)、それが、まさに「(初期)大和王権」を形づくることになった?!

## ⑪「カモ（鴨／賀茂）族」と「ワニ（和邇／和珥）族」の関係及び、その出自?!

さて、ここでは、⑩の続きとなるが、初期ヤマト王権（プレ三輪王朝？）の中心（結び役？）となったのが、「カモ（鴨／賀茂）族」ではなかったかということであるが、一方で、その「カモ（鴨／賀茂）族」は、その後の推移において、王権の参画者？という面（→皇別・吉備鴨氏／神別・天神系賀茂氏）と敵対者？という面（→神別・地祇系賀茂氏）に分かれていった（二つに分かれた?）?!

端的に、そういうことではなかったか？ということであるが、その理由（原因）は、おそらく、後から？近畿に進出してきた「（吉備を經由した？）饒速日勢力」（物部氏？→ただし、それは、直接的には饒速日の子の「ウマシマジ（デ）」勢力か？）が、別の勢力と組んで、「賀茂・三輪（大物主＝龍蛇神信仰）勢力」を駆逐した（裏切った?）?！そして、その「饒速日勢力」が、纏向に、新たな「前方後円墳勢力」を形成した（→纏向祭政都市）?！もちろん、その勢力とは、「ワニ（和邇／和珥）族」（意富／多氏→前方後円墳勢力?）から離反した「天香具山（高倉下<sup>たかくらじ</sup>→尾張氏）族」である?!

要するに、「カモ（鴨／賀茂）族」は、大和建国に関わった中心勢力・氏族ではあったが、その流れ（動き）は、「記紀」（→「新撰姓氏録」）からすれば、まずは「皇別」としてスタートし、そして、そこから、「神別」の「天神系」と「地祇系」に分かれたということである?！そして、その顛末?が、おそらく「カモタケツヌミ（八咫鳥）系」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）系」、そして、「事代主神（恵比寿様?）系」の関係ということになったということである?!

すなわち、吉備から大和葛城に移動してきた「カモ（鴨／賀茂）族」は、まずは、後に山背（城）に向かった「賀茂県主系（カモタケツヌミ系）」（こちらは、その後当地で、「秦氏」や「息長氏」と組んだことは間違いない→上賀茂神社・下鴨神社!）と、葛城に残った「賀茂君・朝臣系」（→高鴨神社・八重事代主神社等）に分かれた?！そして、その後、後者は、何らかの理由で、さらに「アジスキタカヒコネ系」と「事代主神系」に分かれた（多分?「事代主神系」の方が、「三輪氏族（大物主神系）」となった?!）?!

ちなみに、「三輪氏族（大物主神系）」に属する「地祇系」の賀茂氏（→「葛城賀茂氏」）は、第10代天皇「崇神」の時に登場してくる「大田田（多直<sup>おおただ</sup>）根子」の孫「大鴨積<sup>おおかもつみ</sup>」を始祖とし、奈良盆地の西の「葛上郡鴨」（現在の奈良県御所市）を本拠地としたとされるが、これは、「三輪氏族（大物主神系）」と「カモ（鴨／賀茂）族」が、「ワニ（和邇／和珥）族→大（多）氏」を介して、大和葛城で合流・合体?したということではなかったか?!

もし、そうであれば、そこで、新たに頭を擡げてくるのが、彼ら「吉備」の勢力、すなわち「カモ（鴨／賀茂）族」と「ワニ（和邇／和珥）族→大（多）氏」の関係であり、改めて、その彼らの出自（出身地）が、どこであったのかとい

うことである？そしてまた、その、彼らの「吉備での居住」が、いつ、どのようにあったのかということである？！何故なら、彼らが、「吉備」に居住していたことは明らかであるが、彼らが、その時期までに、どこかからか移動してきたことは間違いないからである（例の「楯築墳丘墓」の造営が2世紀後半？とされているので！ただし、それは、3世紀後半以降ともされている？）？！

そこで、改めて、彼らは、どこから移動してきたのか？それは、当然？九州、しかも、南部九州（日向）と北部九州（岡＝遠賀、否、ひょっとしたら糟屋郡阿曇地区？）の双方からということになる？！そして、それが、例の「神武東征」の話（造作）に投影されている（→「宇佐」で合流して、「記紀」での年数は違うが、一時期、「吉備」に滞在している！）？！

ちなみに、その合流部族集団が、「崇神」→「垂仁」期に示されている「和珥」「阿倍」「中臣」「物部」「大伴」各氏の祖達であろう（「紀」では、和珥臣氏の祖・阿倍臣氏の祖・中臣連氏の祖・物部連氏の祖・大伴連氏の祖の5人が、垂仁朝で「大夫まえつきみ」と呼ばれていたとする！）？！

しかしながら、もしそうであれば、そこに「カモ（鴨／賀茂）族」の名がないのは、ちょっと変である？ひょっとしたら、「カモ（鴨／賀茂）族」は、例の「ナガスネヒコ（長脛彦）」に見立てられた？勢力であり、大和で、物部氏（直祖ウマシマジ（デ））に疎んじられたからかもしれない？！ただし、こちらは、「アジスキタカヒコネ系」の「鴨族（賀茂氏）」であり、もう一つの「カモタケツヌミ系」の「鴨族（賀茂氏）」は、「八咫鳥」として尊重されている？！

いずれにしても、逆に、ここでは、その「カモ（鴨／賀茂）族」が「吉備」からの勢力の中心であり、彼らは、当の「神武」集団に見立てられた？だから、件の「大夫」には名前がない？実は、そういうことであつたのではないかということである？！故に、大胆な仮説（空想？）となるが、私は、件の「カモタケツヌミ（「八咫鳥」）」が、「神武」のモデル（ダミー？）だったのではないかと、秘かに睨んでいるわけでもある（彼は、日向の「襲そ」の出身という話もある？）？！

ただし、ここでは多少話は飛ぶが、大和（橿原）で「神武」の皇后となつた「媛踏鞴五十鈴媛ひめたたらいすずひめ命」の母親は、三輪山（「大物主神」）を祭祀する巫女だつたと思われる？！そして、その婚姻は、「神武」（カモ（鴨／賀茂）族？）が、大和の出雲勢力（「大物主神」→「事代主神」系）と合流・合体？したことを物語っている？！そして、他ならぬ、その皇后の出身が、製鉄（踏鞴たたら）と深い関係があつた氏族（出雲族？）だつたということになる？！

一方、その後、「吉備」の（を經由してきた？）「饒速日」（物部？）勢力（後から来た？「伽耶」勢力？太陽信仰族？→後の「崇神」に投影？！）が、先住の「葛城勢力（鴨族）」（「事代主系」と「アジスキタカヒコネ系」）を分断？させ（逆に、この時点で、両系統が出雲と結びつけられたのかも？）、「饒速日」の子の「ウマシ

マジ(デ)」が、「大和王権」(「物部氏族」の政権?)を確立させたということでもある?!だから、「賀茂県主系」は、山背(城)に向かった(逃げた?)?!

とにかく、「吉備・出雲勢力」の先住・先在によって、近畿大和の実態(実体?)はつくられていったと考えられるが、その「吉備・出雲勢力」とは、本当は、北部九州から先に移動・進出していた伽耶・新羅系勢力(倭人)とも考えられる?!「記紀」(「神武東征譚」)からの類推(妄想?)は、2世紀末の「倭国大乱」と、その後の「手焙形土器(前方後方墳)勢力」の近畿大和への集結と全国への進出、そして、その中からの「前方後円墳勢力」の出現という形で後付けされるということである?!

ということで、ここでは、ここが最重要となるが、こうした動きにおける、半島からの渡来人(彼らも「倭人」!),具体的には、伽耶・新羅(一部、高句麗からも?),そして百済系の各勢力の九州進出、そして、近畿大和への移動、そうした動きが、これらと、どのように関わっていたのかである?!端的に、彼らが、誰(どこの勢力)と、どのように組んだのかということであるが、結果的に、九州と近畿大和の並立(→最終的には、百済の「檀魯<sup>たんろ</sup>制」の反映?!)を実現させたということでもある?!

とは言え、かの神武が、BC660年に初代天皇に即位したということであるが(もちろん、それ自体は嘘であるが!),どうもおかしいのは、彼の入和(東遷)の前に、「饒速日」という人物が先に大和入りしており、しかも彼は、現地の?豪族「ナガスネヒコ」に気に入られ(彼の妹を娶り)、王として君臨していた!そしてまた、一方では、出雲系の「大物主」も大和入りしていた!実は、この辺りを、どう整合化させるのかが問題であったわけである?!

しかしながら、それは、2~3世紀頃の大和の実態を表しているものではあるので、実際上は、それは、「神武」と「崇神」、そして「ナガスネヒコ」と「饒速日」の関係を示しているものとも考えられ、しかも「ナガスネヒコ」と「饒速日」の関係は、実は「カモ(鴨/賀茂)族」と「饒速日」の関係を示している?!つまり、饒速日の前に、ナガスネヒコが居たということであるが、そのナガスネヒコが「カモ(鴨/賀茂)族」のことであれば、その「カモ(鴨/賀茂)族」を取り込んだのが「饒速日」、実は「崇神」であったということにもなる?!

ただし、「記紀」は、物語としては、両者の関係/動きを別の時代に設定しているので、便宜上(論理上?),最初の「カモ(鴨/賀茂)族→カモタケツヌミ」を初代「神武」とし、「饒速日」を、第10代の「崇神」としたわけである?!だから、二人とも、「ハツクニシラス・スメラミコト」としたわけでもある(事実上は、「崇神」であろうが?)!もちろん、その間に、いわゆる「欠史八代」の話の挿入しているわけであるが、しかし、それは、別な意味では、重要な「史実(先史?)」ではあったのである?!

## ⑫ 改めて、「倭国大乱」は、全国規模で起こっていた?!

さて、そのように捉えれば、年代的な不整合はあるものの（造作・捏造されているのであるから、それは、ある意味当然ではある?）、初期大和王権（プレ三輪王朝?）における人物／部族集団の集散離合の実態（実体?）は、これによって、かなりスムーズに理解されることになるわけである?!ただし、そこでは、かの「出雲」や「大物主（三輪氏）」の関わりも、改めて見直さなければならぬ?そして、それが、改めて、第10代「崇神」（二番目、実質は一番目?の「ハツクニシラス・スメラミコト」!）と、どのように関係してくるのか?そこが、初期大和王権（プレ三輪王朝?）の真相となってくるのでもある?!

そこで、その初期大和王権（プレ三輪王朝?）の真相、つまり「吉備（→出雲?）」からの諸氏族・勢力の大和への移動・進出、そして、彼らの離合集散のプロセスであるが、それらが、まさしく2世紀末の「倭国大乱」によって惹き起こされたものということであれば（そう捉えると?）、謎の古代史の全体像、少なくとも初期のそれが、かなり明確に示せることになる?!もちろん、かの「邪馬台国（連合）」のことも含めてである?!

ただし、その「邪馬台国（連合）」自体は、その「倭国大乱」によって出現したことは、おそらく間違いないことであろうから、問題は、その大乱が、いわゆる北部九州内（「奴国」を盟主とする「初期倭国」?周辺諸地域を含む?）でのそれであったのかどうかということである?!一般には、北部九州内での争乱であったと受け止められているかもしれないが（例の「魏志倭人伝」によれば、そのようにも解釈される?）、実はそうではなく、その動乱は、まさに全国規模で起こっていたのではないか?!

しかも、これについては、藤井耕一郎氏のアプローチによって明らかにされている、西日本、否、東日本をも巻き込んだ、「吉備」から進出していった「手焙形土器勢力＝前方後方墳勢力」の、「銅鐸／巴形銅器＝環濠集落勢力」への進攻と連動しているのではないかということである?!そこで、もし、そうであれば、そこには、少なくとも二つの疑問（解明課題）が、新たに生じてくることになる?!

一つは、それが、「何故、起きたのか?」、そして、もう一つが、「何故、『吉備』からのものと関係しているのか?」ということである?!ちなみに、それは、直接的には、いわゆる「鉄器の保有・分配」に関わる、「吉備の不満／反乱」が横たわっていたということは、当時の考古学的状況からも明らかであろう（当時は、吉備は、「鉄器」の欠乏地域であった?「青銅器」も?）?!

しかしながら、最終的には、その「吉備」が、まずは「出雲」に進出し、そして抱き込んで（これが、「出雲の国譲り」の直接的なモチーフとなっている?）、「吉備・出雲連合軍?」として、近畿・越・東海、そして関東へと動き、一方

で、その一部（「神八井耳」勢力→「多氏」）が、西日本、とりわけ九州にも進出し（「吉野ヶ里（遺跡）」への進攻！そこに、征服の証し？としての「前方後方墳」を造営している！）、おそらく？「邪馬台国（連合）」の出現に、大きく関与した？！

であれば、そこで「共立」された女王である「卑弥呼」、そして「台与」の登場は（「魏志倭人伝」による！）、そうした「倭国大乱」の結果（直接的な影響？）を反映したものであるということになる？！そういう意味では、これまでの諸説を、大幅に見直さなければならなくなるわけでもある？！

しかも、これについては、そもそも、その「吉備」の勢力とは、どのような勢力であったのか？そして、彼らは、いつ頃、どこから、どのように移動していったのか？という、次なる疑問（解明課題）を呈することにもなるわけである（朝鮮半島や中国大陸から、直接渡来してきたとは考えられない！）？！

とまあ、これまでは、このように考えてきたわけであるが、実は、改めて捉え直してみると、「倭国大乱」自体は、2世紀末（180年前後？）には、一応収束？していたのであり、しかるに、私が、そのことを指していると思っていた、「吉備」からスタートした「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の全国展開は、その「倭国大乱」と前後して（と言うより、むしろその後？）の動きとなるので（170～250年頃？）、それ自体は、いわゆる「倭国大乱」ではないことになる？！

ということは、その「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の全国展開は、おそらく、その「倭国大乱」の結果生じた動き？だということにもなるわけである？！つまり、それは、改めて、（北部九州内の）「倭国大乱」が引き金となったのではないかということでもある？！

要は、先に「（北部九州内の）倭国大乱」があったということであるが、では、改めて、そうした理解を下に、北部九州内での動きを再考してみると、例えば、その「倭国大乱」とは、初期倭国覇権者？の「（倭）奴国」を、隣の「伊都国」が、「どこかの国（勢力）」と組んで弱体化させ、当時の倭国（「漢倭奴国」）の状況を一変させたものだったのではないか？！

そして、それが、これも例えば、107年に後漢に朝貢した「帥升すいしょう」王達の動きだったのではないか（彼らが、160人の「生口せいこう（奴隷）」を連れていったということは、どこかの戦いの勝利によって、それができたということである？）？！ただし、それではなかったとしても、その「（倭）奴国」の衰退そのものは、考古学的にも確かめられるという（「須玖すく岡本」遺跡等の状況）！やはり、そこには、大きな勢力上の（政治的な）変化があったということである？！

とは言え、それは、とても、単独の国（勢力）が「（倭）奴国」を弱体化させたとは考えられない？！やはり、そうであれば、その後（2世紀末以降？）、例の「邪馬台国（連合）」が出現してくるわけであるので、その「どこかの国（勢力）」とは、当然？「邪馬台国」自体となるわけである（しかも、その連合を、伊都国

に常駐する「一大率いちだいそつ」によって維持させている？そのように、理解されるのである？）?!

そこで、改めて、その新興？勢力の「邪馬台国」であるが、先に述べた、「神八井耳」→「多氏」の勢力とは考えられないだろうか？彼らが、九州にも進出し（「吉野ヶ里（遺跡）」への進攻！そこに、「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の進出（征服？）の証しである「前方後方墳」を造営した？）、その後の「火（肥）の君」「阿蘇の君」「大分の君」、そして「筑紫の君」の祖ともなったということであるので、その史実？には、かなりの蓋然性があるということにもなる?!

ということで、もし、そういうことになれば、その「多氏」（「神八井耳」勢力）が、いつ頃、どのようにして、北部九州（中部かも？）に入り、一方で、「伊都国」勢力と、どのように出会い、協力関係をつくっていったのかということが、解明されなければならない?!そしてまた、一方では、旧来の「（倭）奴国」勢力が、それにどのように対処し、そして、全国に（朝鮮半島にも？）散らばって（逃げて？）いったのか？その辺りが注目されることにもなるということである?!

ちなみに、その場合は、件の「倭国大乱」は、やはり北部九州でのそれということになり、170年頃からの、吉備の「手焙形土器（前方後方墳）勢力」の全国進出（征服？）は、その波動（余波？）によって惹き起こされたものと考えなければならない（なお、おそらく、瀬戸内海沿岸の「高地性集落」の出現は、それと連動している？）?!

ただし、件の「伊都国」の、旧来の王族自体（の一部？）も、「奴国（王族）」とともに、新しい勢力によって、各地に散らばりを余儀なくされたのかもしれない（和歌山紀ノ川沿い、あるいは伊勢湾岸への移住等！直接には、「朱丹」を求めて！その双方には、いわゆる「伊都（イト・イツ・イセ？→伊勢・志摩）」がある！）?!

そして、これについては（今はまだ、単なる着想だけの段階であるが！）、その過程において、「太陽信仰族」と「龍蛇神（ワニ？）信仰族」が、「吉備」で合流（合体？）し（それが、多分「海神（龍／ワニ神）」と「カモ（鴨／賀茂？）」の関係として、「記紀」に記された?!）、「手焙形土器（前方後方墳）勢力」となり（「出雲」を経て「近江」で?!）、その一部が、西（九州）へも向かった（戻った？）?!それが、上述の「多勢力（→「神八井耳」勢力の一部）」ではなかったか?!

であれば、彼らの進出による新興「邪馬台国」は、「伊都国（勢力）」と組んで、「邪馬台国連合」（「親魏倭王」の国）を確立させた?!ちなみに、その「伊都国（勢力）」とは、「加也かや山」周辺に移り住んできた「伽耶・新羅勢力」で、彼らは、「素戔鳴命」（ないしはその子とされる「五十猛いたける命」）を祖としている（『書紀』には、後の「怡土いと県主五十迹手いとて／伊蘇志いそし」は、彼らを祖としていたという）?!

### ⑬「奴国」「伊都国」、そして「邪馬台国（連合）」の関係は?!

ということで、ここでは、改めて、「奴国」「伊都国」、そして「邪馬台国（連合）」の関係はということになるが、その前に、前述の「伊都国」においては、後の「怡土いとと県主五十迹手いとて／伊蘇志いそし」は、一方で、自らを、「高麗こまの国の意呂おろ山に、天より降り来し日杵ひぼこの裔苗あと」としていたらしい（『筑前国風土記』より!）?!

ならば、その「日杵」とは、かの「天日鉾（矛）あめのひぼこ命」のことかと思われるが（ただし、その天日鉾（矛）は、最終的に、但馬の出石に本拠地を構えているので、その解釈は、かなり複雑とはなる?）、いずれにしても、「伊都国」には、代々「国王」がいて（その考古学的証拠は、当地の王墓群の存在に見られる!）、「奴国」と共に、対外交易で覇を競っていたことは間違いない?!

しかしながら、その「伊都国」が、例の、2世紀末（AD180年頃）の「倭国大乱」を経て、新興国家「邪馬台国」と組んで?、連合（新たな倭国）の玄関口（人・物資の通用口）の役割を果たしていた（「一大率いちだいそつ」の常駐等）?! これは、どう見ても、新興国家「邪馬台国」の一方的な進出の結果ではなく、双方の合意によるものと考えられるわけである?! だからこそ、かつての大国「奴国」の覇権を奪うことも出来た?!

しかるに、それ以前のAD57年に、後漢王朝から「漢委（倭）奴国王」の印綬（金印）を貰った「奴国」（の王）であるが、その後の「邪馬台国（連合）」の出現に際しては、そこの王の存在自体は影が薄くなっており（人口は多いが!）、構図としては、「邪馬台国」と「伊都国」の新たな紐帯?が、大きな力を有していたと考えられる?!そして、その紐帯の確たる証しが、かの「一大率」の伊都国常駐ではないかということである?!

ちなみに、「伊都国」は、繰り返しになるが、「加也山」周辺（糸島半島西部）から、「三雲」を中心とした糸島平野の中央部に、その拠点を移しているようである。そこでは、弥生時代中期後半から終末期にかけて「厚葬墓こうそうぼ」（王墓）が連続して営まれており、それが「三雲南小路遺跡」「平原遺跡」等であり、また、その中の「井原鍬溝やりみぞ遺跡」は、遺物の点から「將軍墓」の可能性が高いとも言われているのである?!

ところで、これも先の、107年に後漢奉獻を行った倭国王「帥升」（等）であるが、彼が「奴国王」であったのか、それとも別の国の王であったのか（「倭面土わめんど→やまと?国」の王とも記されているが?）、その倭国（「倭面土国?」）では、「卑弥呼」の前に、70~80年間男王の世が続いたということであるので、それが、この国であったことは間違いない?!「生口（奴隸）」160人を連れていったということであるが、多分それは戦争による戦利品?であったと考えられるので、その時期に、大きな政治変動が生じていたことは、おそらく間違いない

であろう（ただ、彼らは船で渡航したわけであるから、「生口（奴隷）」160人の移送が可能であったのかどうかという疑問はあるが？）？！

いずれにしても、これは、さらなる仮説（空想？）となるが、もし、その「帥升王」を、例の「素戔鳴命」のモデルだとすればどうなるか（そう指摘している人もいようであるが？）？要は、その「帥升王」（「素戔鳴命」？）が、「伊都国」の地から、「(倭) 奴国」の覇権支配を変えた人物であったならば、その後、彼の王統が70～80年間続いて、件の「倭国大乱」によって、「邪馬台国」の女王「卑弥呼」が共立されたということになる？！

ということは、この場合、「倭国大乱」とは、「(倭) 奴国」の衰退と「邪馬台国」の台頭という結果をもたらしたのものとも言えるが、そこに、「伊都国（or 倭面土国？）」の「帥升王」の介在が考えられるのではないかということである？！少なくとも、「(倭) 奴国」の衰退は、「伊都国（or 倭面土国？）」と「邪馬台国」の共闘によって実現されたと考えることが出来るわけである？！

そしてまた、一方では、「邪馬台国」自体は、「丹波（→「丹後」）」に移動した、例の「火明ほあかり系」（九州物部氏？）の「海部氏（倭直氏←珍彦／菟道彦）」が関わっていたのかもしれない（←「海部氏勘註系図」）？！「卑弥呼」の死後、一悶着があり、13歳の宗女の「台与」が共立されたと、「魏志倭人伝」は記しているが、そこに、例えば「多氏」と「海部氏」の関係が絡んでいたとすれば、その辺もまた、考えていかなければならない？！

とは言え、まずは、ここでの問題（説明課題）は、その「伊都国（or 倭面土国？）」の「帥升王」の系統が、その後どうなったのかであり、もし、それが、「邪馬台国」の女王「卑弥呼」勢力に排斥され（邪魔にされ）、経路はともかく、「吉備」の方に移っていった勢力であったとすれば、その後の、「吉備・出雲連合」の話が、俄然真実味を増すことになる（その傍証として、吉備の「楯築遺跡」には、膨大な「朱」が敷き詰められていた！そして、その「朱」は、実は「伊都国」でも産出され、否、集積されて、その積出港として栄えていた？！当時は、「朱」は、高価な交易品となっていたのでもある？！）？！

すなわち、それは、例の「素戔鳴命」の高天原追放、そして、出雲降臨等の話となるのであるが、ここでは、かなりこじつけ的ではあるが、「帥升王」と「素戔鳴命」、名前の語呂的な近親さもさることながら、その役割（活躍？）が似通っているとも言えるのではないか（最初に開拓したのに、それが奪われた→同じ「天神」でありながら、先に地上に降り、姉？の「天照大神」に嫌われる？）？！

言い換えれば、（九州からの？）吉備の勢力が、全国制覇？に向けて動き出すのが、まさに「倭国大乱」前後なのであるが（170～190年頃？）、その後、彼らの勢力（「手焙形土器」→「前方後方墳勢力」）は、出雲に進出し、そして、彼ら（の一部）を抱き込み、やがて播磨、河内、近江へと進んでいった？！

ただし、出雲は、元々の北部九州との利害関係を維持する勢力（と言うより、出雲から北部九州に支配を広げていた勢力→出雲王国？）と、一方で、吉備と合流した、言わば新しい勢力（「意富（宇）／多<sub>おお</sub>」勢力？→「ワニ族」？）に分かれた?!それが、おそらく、「記紀」が伝える「出雲振根」と「飯入根」（兄弟？）の逸話であろう（前者が後者を殺すが、最後には、後者は、大和政権に殺された!）?!

そして、彼ら（「意富（宇）／多<sub>おお</sub>」勢力？）は、まずは「近江」に集結し、そこから、同じく吉備出身（というよりは「経由」？）の太陽信仰族（三輪氏／大神氏?→物部族?）と「大和」で合流し、彼らは大同団結し、より大きな「前方後円墳勢力」となった?!その中心勢力（饒速日一族?）が、後に「物部氏」と呼ばれるようになった?!おそらく、これが、いわゆる「(初期)ヤマト王権」と呼ばれるものの実態（実体?）なのではないかということである?!

とは言え、ここで、改めて頭を悩ますのは、「海神」、つまり「安（阿）曇族」や「海部族」（その後の「宗像族」や「住吉族」も含めてであるが!）のことであるが、彼らが、どこの国（勢力）の海洋交易民で、彼らが、どのように連なっているのかである!

例えば、どこかの国（勢力）の王族となっていたのか、あるいは、あくまでも「海洋交易民」としての自由な航海と交易を求めて、様々な国（勢力）と、言わば独立不偏の関係を有していたのかどうかということである!もちろん、その代表格（最大勢力）が、北部九州の志賀島（志賀海神社）に根拠地をもつ「安（阿）曇族」である（彼らは、まさに、全国津々浦々に飛び散っていた!）。

ちなみに、かの「漢委（倭）奴国王印（金印）」が、その志賀島の、まさに何の変哲もない海岸部の河原（棚田?）で発見されたということであるが、その埋蔵が、そこの統治者である「安（阿）曇族」ではなく、それ以前の?「奴国」の王族の関係者（こちらも海人族?）の仕業であるとしたら、その「奴国」と「安（阿）曇族」の関係もまた、新たに検討されなければいけないことになる?!

と言うのも、一方で、その「安（阿）曇族」は、奴国の隣国の「伊都国」と（も?）関係があると思われるからである?!何故なら、その海洋交易民「安（阿）曇族」が詠っていたとされる和歌?（それが、明治期に、『古今和歌集』より採用され、「君が代」の歌となった!）にまつわる逸話や神社（例えば、「細石<sub>さざれいし</sub>神社」）等が、実は、その伊都国にはあるからである!

その意味では、「安（阿）曇族」は、「奴国」とも「伊都国」とも関係があり（もちろん時期的には、そのつき合いの軽重は違っていた?）、彼らの海運力・ネットワークによって、その両国は支えられていた?!また、そういう中で、一方の「奴国」の衰退があったわけである?!しかしながら、それに直接呼応した形の「安（阿）曇族」の衰退はなかった?!つまり、志賀島（志賀海神社）自体の衰退はなかったということである?!

#### ⑭ 改めて、「安（阿）曇族」とは?!そして、「隼人族」との関係は?

さて、ここでは、改めて、その「安（阿）曇族（→ここでは、以下、「安曇族」と表示）」とはどういう部族だったのか?!そして、彼らと「隼人族」との関係はどうであったのか、その辺りのことについて整理しておきたい!ある意味、その関係の解読?は、本古代史解明における最大の鍵となるかもしれないからである?!とりわけ、かの「神功皇后」や「武内宿禰」に関わっている「住吉大神」との関係である（その神は、絶対に「隼人族」と関係している?）?!

そこで、まずは、ここで頭を過るのが、いわゆる「江南系倭人（海人族）」に特有の「阿曇目<sup>あづみめ</sup>」（目の縁の入れ墨）のことである!ただし、その「阿曇目」は、ここで言う「安曇族」ばかりでなく、例の「神武東征」に付き従った「久米一族（「大久米命」←「大伴連」等の祖「道臣<sup>みちのおみ</sup>命」と「久米直」等の祖）」にも見られるという（←神武の後「伊須氣余理比賣<sup>いすけよりひめ</sup>」の逸話）。

ちなみに、「大伴氏」も「久米氏」も、初期の大王に仕えた軍事氏族として、勇名を馳せるのであるが、後には、「大伴氏」が大王家筆頭の軍事氏族になっていく?!また別途、「佐伯氏」（豊後の大族「大神氏」の一族）とも軍事協力関係があったとされる?!とにかく、これらの氏族は、「阿曇目」を有する南方系の海人族（倭人）であるということである（例の「宗像氏」も同系列か?）?!

しかしながら、ここで重要なのは、件の「隼人族」と、ここで取り上げている「安曇族」との関係である!すなわち、「安曇族」は、博多湾内の志賀島を聖地とした、江南出身の海洋交易民と考えられるが（「倭奴国」の王族?）、「隼人族」や「宗像族」は、彼らの同胞?であり、特に「隼人族」（の一部）は、「安曇族」と組んで（東シナ海/九州西回り）、後に、「住吉族」となった?少なくとも、例の「住吉大神」と関係している（そのことは、「宇佐神宮」、その系列の「古俵/古要神社」の「傀儡<sup>くわい</sup>舞」の怪?として残されている!どうみても、そこには、「隼人」の後見人?としての「住吉大神」がいるのである!）?!

ここで、少し面白い手がかりがある?!それは、例の、「息長氏」が関わっていると思われる、彼らの元の?根拠地（「秦王国」の一部?）であった香春岳の「香春神社（「辛国息長大姫大目神社/「忍骨神社」/「豊比咩神社）」の社前に書かれている、「第一座辛国息長大姫大目命は神代に唐土（中国）の経営に渡らせ給比、崇神天皇の御代に帰座せられ、豊前国鷹羽郡鹿原郷の第一の岳に鎮まり給ひ、第二座忍骨命は、天津日大御神の御子にて、其の荒魂は第二の岳に現示せらる。第三座豊比売命は、神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母にして、第三の岳に鎮まり給ふ、各々三神三峰に鎮座し、香春三所大明神と称し崇め奉りしなり。」のことである!

問題は、そこの「第三の岳の祭神」である「豊比売（比咩）命」のところである!すなわち、彼女が、「神武天皇」の外祖母であり、また、「住吉大（明）

神」の御母ということであれば、その「住吉大（明）神」は、少なくとも母系的には「ワニ（族）→和珥氏」ということになる?!私は、最初、「神武天皇の外祖母、住吉大明神の御母」と書かれているので、「住吉大（明）神」とは、「（「日向三代」の）ウガヤフキアエズ」のことと受け止めていたが、改めて考えてみると（彼は、「神武」の父親なので、不可思議だとは思っていた?）、実は、「神武天皇の外祖母」とは、（「神武天皇」の母親の）「玉依姫」の「母親」ということになる!

そうなれば、その「玉依姫」と、姉である「豊玉姫」（ホオリ／ホホデミ／山幸彦の妻→彼女は「ワニ（族）」であった?!）の「父親」は、かの「海神（豊玉彦）」であるので（少なくとも、「豊玉姫」の場合はそうである?）、「住吉大（明）神」も、「海神（豊玉彦）」の子で、彼は、彼女らの兄弟か、別の父親との「異父兄弟」ということになる（もちろん、「豊比売（比咩）命」が、彼女らの「母親」である!）?!つまり、「住吉大（明）神」には、「海神（豊玉彦）」、さらには「ワニ（族）」の血が流れていたとも考えられるのである?!

さて、そうなると、改めて、「海神（豊玉彦）」と「豊比売（比咩）命」は夫婦?ではあるが、「住吉大（明）神」が、彼らの子なのか?それとも、「豊比売（比咩）命」と別の男性との子なのか?ということにもなる!もし、後者であれば、当然「豊比売（比咩）命」は、二つの部族（勢力）と関係を持っていたということになる（ちなみに、「玉依姫」は「カモ族」につながる?）?!

もちろん、常識的には?前者であるとは思われるが、いずれにしても、「海神（豊玉彦）」は、いわゆる「安曇族」、「豊比売（比咩）命」は「ワニ族→和珥氏／多氏?」（←少なくとも、娘?「豊玉姫」が「ワニ（族）」であるようなので!）と考えられるので、このつながり?は、「安曇族」と「ワニ族→和珥氏／多氏?」の関係を暗示していることは明らかであり、「住吉大（明）神」も、その関係であることは、これまた明らかであろう?!

しかし、一方で、その「住吉大（明）神」は、「隼人」の血筋も受けていると考えられるので、「海神（安曇族）」と「住吉大（明）神（隼人族?）」が、そのような血縁関係（「豊比売（比咩）命」を介して!）でつながっていることは、ある意味当然なのかもしれない?!何故なら、「海神（安曇族）」と「隼人族」は、東シナ海／玄海灘における「大海人族?」として協力・活躍していた?!

すなわち、「隼人」（ハヤヒト?）とは、別の?「航海神」を祖に戴く、操舵に巧みな「海人系氏族」であることは間違いなく（「応神」以降?、朝廷の警護や河川航行での先導役を務めている!）、そのことも含めて（「記紀」では、ある意味虐げられているようではあるが?）、彼らの存在の大きさ?が示されている（その証拠に、「隼人」の祖ホデリ・ホスセリ／海幸彦が、天孫ニギノミコトの三子神の中の長男とされている!）?!

翻って、また、『日本書紀』では、「阿多の国つ神『事勝国勝ことかつくにかつ神は、是伊弉諾尊の子なり。亦の名は塩土老翁しおつちのおきな』とあり、阿多の国津神、すなわち、阿多隼人の祖神が塩土老翁＝シオツチの神と明記されている」（宮島正人氏）。実は、その「塩土老翁」は、ここで言う「住吉大神」とも考えられており、そうなれば、彼は、限りなく「隼人族」と結びつくこととなるわけである?!

ただし、その「住吉大神」を祭神として祀っている「住吉系神社」（大阪、下関及び福岡市には、それぞれ本社のな？「住吉大社／神社」がある！）の祭主は、「物部系？」の「尾張氏」と同族の「津守氏」とされている！果たして、その「津守氏」が、ここで言う「隼人系」の氏族なのかどうか？残念ながら、そのことについては、今のところよく分からないが（だが、そうした氏族系譜については、後々の造作によって、かなりの変異が見られる！←『新撰姓氏録』）、「住吉大神」（住吉族？→津守氏）が、一方で、「武内宿禰」「神功皇后」「応神天皇」と関わりながら、瀬戸内海航路を牛耳っていたことは確かである?!

とは言え、この辺りの事情（史実？）は、かの「倭の五王」の時代（5世紀）の頃と、ほとんど？被っており（したがって、一番厄介な時代？）、それらとの関係性（整合性）が、改めて問われるところではある！すなわち、そこに、「伽耶」や「百済」との関係が、どのように絡んでいるのかということである?!

いずれにしても、そのことを、他ならぬ新羅系の「息長氏」が、自らに関わる歴史？として書き記していること自体は、別な意味で不思議なことではある?！それは、先述の、香春岳の「香春神社」の「社前書」のことであるが、「武内宿禰」や「神功皇后」のことはともかく（彼らは、身内であるので当然である？）、「神武天皇」や「豊比売（比咩）命」、そして、何より「住吉大（明）神」までも、自らの事績・関係性？と関わらせて書いているのである?!

つまり、「辛国息長大姫大目命」はともかくとして（「新羅」から持ち込んだ、彼らの祖先神？）、「忍骨おしほね命」（天孫ニギノミコトの父親→「忍穂耳命」？）や「豊比売（比咩）命」までも、その身内としているのである?！まるで、「記紀」における「高天原神話」を熟知しているかのようである?！とすれば、ひょっとしたら、そのストーリーの元話は、彼らの内にあったということか（否、彼らが、創作した?）?!

まあ、これについては、これから、改めて考え直して（追求して）いくことになるだろうが、この時点で、「記紀」の編纂（その原案づくり?）においては、藤原氏（不比等）だけでなく、その利害共有者（理解者／協力者?）であった「中臣氏」、そして「息長氏」、さらには「秦氏」が、大きく関わっていたということである（特に、後二者は、いわゆる「記紀」編纂を先行あるいは潜行させていた?）?！とりわけ、ここの文脈では、「息長氏」の関与が大きい?!

⑮「製銅・製鉄族（山の民→山つ霊→山祇<sup>やまつみ</sup>）」と「海人<sup>あま</sup>族（海の民→海つ霊→海神<sup>わたつみ</sup>）」の相剋と建国?!

ということで、「記紀」が示す「神話」や「逸話」は、8世紀初頭の覇権者達（ある意味「勝利者達」？）が、自ら（の先祖）の正当性や正統性を遡及させるべく、可能な限りの情報を駆使して創り上げた、一つの大きな歴史物語であったということであるが（「正史」という形を採っているが！）、そこに、どのような事情、背景が横たわっていたのかである?!

さて、そんな中で、改めて、我が国古代史の全体像を俯瞰してみると（もちろん可能な限りではあるが！）、直接的には、「記紀」に示された「神々の体系」からということにはなるが、その構図は、いわゆる「製銅・製鉄族（山の民→山つ霊<sup>み</sup>→山祇／山積<sup>やまつみ</sup>族）」と「海人<sup>あま</sup>族（海の民→海<sup>わたつ</sup>つ霊<sup>み</sup>→海神<sup>わたつみ</sup>族）」の相剋と、彼らが織りなしていった建国の流れのように受け止められる?!

そして、その最終的な形「大和王権（大和朝廷）」は、その「製銅製鉄族（山の民→山つ霊<sup>み</sup>→山祇／山積<sup>やまつみ</sup>族）」と「海人族（海の民→海<sup>わたつ</sup>つ霊<sup>み</sup>→海神<sup>わたつみ</sup>族）」の合流・合体の産物であった（そして、そのことを、暗に示しているのが、「記紀」の「日向三代」の物語ではないか?）?！そういうことである?!

ただし、その構図（流れ）には、当然かなりの紆余曲折があったということであり、その最終的な覇権者（勝利者?）となった百済系王族（天智系／温祇系余氏、直接的には「藤原氏」）と、その理解者・協力者であった幾つかの氏族達（中臣氏、息長氏、秦氏等）は、そこでの、自らの（氏族の）正統性・正当性を、「記紀」という歴史物語（実際上は、「正史」とした『日本書紀』）によって遡及しようとした?!

そして、その遡及の大きな視点（軸?）が、まさに「製銅・製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」（双方共に、基本的には「渡来系倭人」ということになる?）の、合流・合体の歴史ということである（そのようにしたということ?）?!

したがって、もちろん、そのこと自体は、ある意味事実であったわけであるので（ただし、その中には、実際の離反や衝突といった要素も含まれている!）、我々の古代史解明の、一つの大きな手助けともなるわけであるが、問題は、その「製銅・製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」とは、具体的には、どういう種族であったのか?そして、彼らは、どのように我が列島（倭国）に入り、どのように、その活動（生活）を展開していったのかということである!

尤も、そのことは、「弥生人」全体、そして「縄文人」全体も、そういう人々であったわけであるので（元を辿れば、新人類／ホモサピエンスは、アフリカから出立していった→グレート・ジャーニー!）、それはそれでいいのであるが、冷静に受止めてみると、「記紀」が示す史実?（「神代」を含めて!）は、どう考えても、3世紀前後（決して、BC660年頃ではない!）の「大和」（奈良盆地）の

状況から始まっている?!そして、実は、そのことを示すものが、「神話」として描かれている、「天孫降臨」から「神武東征」の話ということである?!

ということは、8世紀初頭に、最終的な覇権者（勝利者?）となった百済系王族（天智系／温祇系余氏、直接的には「藤原氏」と、その理解者・協力者であった幾つかの氏族達（中臣氏、息長氏、秦氏等）は、我が国の「建国」は、その時の「大和」から始まったという認識をもっていた（決めた?）ということである（多分、それは、第10代の「崇神」からということである?だから、彼を、「御肇国天皇ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」とした?）?!

であれば、その初代「神武」はどうなるのか?彼もまた、まさに「始馭天下之天皇ハツクニシラス・スメラミコト(始祖王)」とされているではないか!周知のように、彼は、人皇初代と位置づけられているように、自身は、いわゆる「神」ではなく、「人」（の最初?）である!そして、そこから、第10代「崇神」、さらには、それ以降の天皇系譜が示されているわけでもある!だから、彼も、「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」とされた?!

時代も、意味も違うので（そのようにされた!）、そこに、それぞれの「ハツクニシラス・スメラミコト」がいても不思議ではないが、やはり、そうは言っても、国を創始した人物が二人いるということは、どう考えてもおかしい?!先行する人物（天皇）の「始祖性」を、後から来た人物（天皇）が継承した!だから、二人の「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」がいる!遙か後世の人間（「記紀」編纂時の政権）として、その二人の人物（天皇）を、正統な始祖として、ある意味平等に認める!そういうことであつたのか?!

しかし、やはり、それでも変である?そこに、何らかの事情（目論見?）があつたとしか思えない?!考えられるのは、一人の人物（の事績）を、時代的に引き離し、二人（の事績）に分けた?あるいは、二人はともに、まさに「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」に相応しい人物（の事績）であつた?!しかも、彼らは、3世紀中頃?の「同時代人」であつた（何故なら、「神武」のBC7世紀頃は、考古学的にみて、そうした事績自体が存在し得ないからである!）?!

そこで、後者の場合は、後の、ある中心（起点）人物（天皇）からすれば、まさにそのようになる?!その人物（天皇）の父系と母系に、それぞれ「ハツクニシラス・スメラミコト（始祖王）」に相当する人物（天皇）がいたということである?!であれば、それは、ある意味当然の成り行きとなる（ただし、当時は「母系」でのそれであつた?それ故に、そこには、ここで言う「製銅・製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」の婚姻関係が、期せずして示唆されているとも言える?）!

ちなみに、ここで言う「ある中心（起点）の人物（天皇）」とは、8世紀初頭に、最終的な覇権者（勝利者?）となった「百済系王族」（天智系／温祇系余氏、直接的には「藤原氏」と、その理解者・協力者であつた「幾つかの氏族達」（中

臣氏、息長氏、秦氏等)の覇権の出発点となった、第15代の「応神天皇」であることは、ほぼ間違いない?!

ただし、その応神だとして、実際の人物(天皇)であったわけではなく、言わば、上記の百済系王族と、その理解者・協力者であった幾つかの氏族達によって創り出された?人物(天皇)であった?!とは言え、もちろん、それに相当する、つまりモデルとなっている人物はいたのである(百済系王族/沸流系余氏・百済残国兄王藤→倭の五王「讚」の父親?)?!

ということで、私は、現在、かなり、この後者の見解(類推?)に近づくものであるが、もし、そうであれば、具体的な史実として、それはどうであったのか?そここのところの解明が、是非とも欲しいということになるわけである!しかるに、ここでは、その具体的な証拠は、なかなか提示することは出来ないが、その大枠については、かの「記紀」、とりわけ、その「神代期」の記述から類推することは出来るわけである?!

何故なら、「記紀」の「神代期」のストーリーは、「人皇期」までの、言わば先史的な事実ではなく、その後続いた、各種氏族/勢力の動き(攻防/興亡?)、そして、彼らが果たした役割を、まさに「神話(「高天原神話」)」として再構成(脚色?)したものと考えられるからである?!要は、そこにあった、それぞれの史実?を投影(変形?)したものであるということである(ただし、見かけ上は、当然ながら、時間的な前後関係となっている!そこが、ミソなのである?)?!

そこで、そうした「神話」から、ここで言う「製銅・製鉄族(山の民→山つ霊<sub>み</sub>→山祇/山積<sub>やまつみ</sub>)」と「海人<sub>あま</sub>族(海の民→海つ霊<sub>み</sub>→海神<sub>わたつみ</sub>)」の相剋と、彼らが織りなしていった建国の流れを確認していくと、双方は、「天照大神」系と「素戔鳴命」系に対応させられている?!言い換えれば、前者は、後から進出してきた「扶余・百済系(一部伽耶系が加わっている?)」、そして、後者が、先に進出していた「江南系/伽耶・新羅系)」ということであるが、別な言い方をすれば、前者が「高天原(天津神)系」、後者が「出雲/根の国(国津神)系)」ということでもある?!

ただし、もちろん、「製銅・製鉄」と「漁獵・海洋交易」という、言わば「生業」的な区別は、分かり易いが、あまりにも単純過ぎる?!つまり、その「生業」的な要素は、双方の種族/勢力のどちらにもあったわけであり(協力関係や婚姻等によって、両者は融合されてもいった?)、それでもって、双方の種族/勢力を特徴づけることは出来ない(危険である?)ということである!

とは言え、少なくとも、彼らの中には、種族/勢力としてのアイデンティティ、そして、受け継がれてきた習俗・文化等は、それぞれに大切にされ、ものによっては、それらが、自らの象徴とでも言うべきものとなっていた(例えば、「安曇族」の「安曇目」等?)?!そういうことである!

## ⑩ 敢えて、「高天原神話」の構図？を描き出してみると？

さて、そこで、⑨からの続きとなるが、そこでの「海人<sup>あま</sup>族（海の民→海つ霊<sup>み</sup>→海神<sup>わたつみ</sup>）」の中に、かの「賀茂氏（族）」が入るのかどうか？そして、入るとすれば、どのように入るのか？「神武東征」で、紀伊・熊野、そして大和入りで大いなる働きをしたとされる「カモタケツヌミ（八咫鳥<sup>やたがらす</sup>）」（彼自身は、日向の「襲<sup>そ</sup>」の出身とされる？←『山城国風土記』）、そして、神武が、大和入りの最後の準備をしたとされる「吉備」のこと（そこには、吉備勢力の象徴？「手焙型土器」の発生地、「西加茂遺跡」もある→現在も、広大な「加茂地域」がある！）、さらには、「事代主」や「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」等を考えれば、当然「海人族」であったということでもある？！

そこで、ここで、改めての挑戦？として、「記紀」最大の舞台仕掛け？「高天原神話」の構図？を描き出してみることにしたい！ただし、もちろんそれは、様々な要素（材料）から構成されているので、そう単純には描けない？！だが、その基本構図は、最後の覇権者（勝利者？）「持統・藤原政権」自らの正統性・正当性（権威）の淵源を示す、言わば「見取り図」でもあるので、そこに、どのような真実が埋め込まれているのか、それがよく分かるというものである？！

ただし、最初の「天地創造」のことは、よく言われるように、古代中国の思想（書物）からということであるが（特に『淮南子』から！）、いわゆる「伊弉諾」と「伊弉冉」男女二神の「国生み／神生み神話」は、キリスト教の「アダムとイブ」の話から創出（借用？）されていることは、ほぼ間違いないであろう？！ちなみに、例の「聖徳太子馬小屋出生譚」も、そうである？！

それらは、当時の「遣唐使」が持ち帰った、ネストリウス派キリスト教＝景教の影響、あるいは古代イスラエルにルーツを有する？「秦氏」の介在ということになるが、その話（祖先伝承？）を「記紀」に持ち込んだのは、その「秦氏」なのではないか？！すなわち、それは、謎の？「消えた古代イスラエル 12支族」の話とも関係してくるわけであるが、その痕跡・事績は、実は無数にあるのである（神社の鳥居、神輿等？）？！

ただし、ここでの問題は、そこからであり、一つは、最初に出現し、協力し合った男女一対神「伊弉諾（系）」と「伊弉冉（系）」であるが、それが、結局は破局を迎え、前者の「伊弉諾（系）」が、「高天原」をリードすることになり、彼が、「天照大神」や「素戔鳴命」（「蛭子」「月読命」もいるが！）を単独で生み、その後、「（姉の）天照大神（系）」が天上（「高天原」）、「（弟の）素戔鳴命（系）」が海原／地上（葦原中つ国→出雲）という風に分かれたとするわけである！

そして、最後に、その天上（「高天原」→天神系）の「（姉の）天照大神（系）」が、海原／地上（葦原中つ国→「出雲」→地祇系）の「（弟の）素戔鳴命（系）」の子孫（子ども？）の「大国主命」に「国譲り」をさせ、その後は、その「（姉

の「天照大神（系）」が、「倭国→日本国」を創り出していった?!もちろん、これは、「(姉の)天照大神（系）」が「持統・藤原政権→高天原系←百濟（扶余）王族?」、「(弟の)素戔嗚命（系）」が「蘇我氏／物部氏等→根の国系←出雲神族?」を象徴していることは明らかである?!

前者が、まさに「高天原系」であり、後者が「根の国系」であるということであるが、そこには、「陰陽思想」（あるいは「善と悪の抗争」←ゾロアスター教／拝火教）が取り入れられているようでもある?!とは言え、要は、そこに示されている「二神（天照大神と素戔嗚命）の役割（関係性）」が重要であり、その役割（関係性）から生まれた（「誓約ちかひ」によって!）、次の「宗像三女神」と「五男神」の役割（関係性）が、さらに大きな意味をもっている?!

すなわち、これ自体は史実であり、まったくの創作あるいは、何かからの借用?では決してないということである（逆に、実際の史実?に、その存在・関係性を被せているということである?）?!ということは、ここから、件の「三女神」と「五男神」の話を、いかに「史実として?」再現できるかということであるが、前者については、直接的には、「天武・高市系」（宗像徳善／尼子姫⇔宗像氏←三沼君氏／筑紫君氏等?）と、ある意味容易に類推される?!

すなわち、「天照大神」と「素戔嗚命」の誓約による、片や「(宗像)三女神（←スサノオの物実）」、片や「五男神（←アマテラスの物実）」の関係はどうなるのかということであるが、前者には、「天武」と「宗像君尼子媛」の関係があり、その子「高市皇子」は、天武の死後、後継天皇に即位していた（最古の漢詩集『懷風藻』による）?!ならば、そこに、「宗像氏」との関係が埋め込まれていても、何ら不思議ではない?!

ただし、果たしてそれだけで、かの「素戔嗚命」の物実として、「宗像三女神」が位置づけられるのか?考えられるのは、例えば、「出雲大社」に祀られる「宗像三女神」の長女?「田心たごり／たざり姫」（宗像大社沖津宮祭神）、「宇佐神宮」の主?祭神「姫大神」（「宗像三女神」とされている!）、「厳島神社」の「市杵島姫命」（宗像大社辺津宮祭神）等の存在である?!故に、彼女らは、みな出雲（大国主命）系の関わりであるということになる（ただし、何故か、三人の姫神は、本元の「宗像大社」では、その祭祀宮に不整合があるようではある?）?!

しかも、「田心たごり／たざり姫」は、例の「カモ族」の「アジスキタカヒコネ」と「下照姫」の母親でもある!また、その妹の「下照姫」の夫は、「高皇産靈神」に殺された「天雅あめわか彦」である!さらに、かの「事代主神」も、同じ「カモ族?」の「神屋楯かむやたて比売命」と「大国主命」との間の子とされている（ただし、「田心姫」と「神屋楯比売命」は、同一人物（神）ということもある!）?!

ということで、「宗像三女神」は、まさに「出雲」の「大国主命」と関係（夫婦神）があるのであり、その意味で、「素戔嗚命系」（物実）とされるのは、ま

さに至当なのである?! そうなってくると、ここには、それこそ壮大な史実? が横たわっていたことになる(そして、「カモ族(→賀茂氏)」が、その中心にいる?)?!

そこで、また、そうであれば、後者の「五男神」の系統(氏族・勢力)が、どのようであったのかということになってくるが、それは、実際の大和(倭国→日本国)建国に際して、最後の覇権者(勝利者?)「持統・藤原政権」から見て、まさに身内として参画・協力した氏族・勢力を、言わば「兄弟として」集合させていることは間違いない(ただし、そこにも集散離合はあった?)?!

すなわち、彼らは、長男「天忍穂耳<sup>おしほみみ</sup>」(→天皇家※だが、実質は「息長氏」を指している?)はともかく、「天穂日<sup>ほひ</sup>」(尾張氏一派?→出雲臣、土師連等の祖。彼らは、出雲に同化した?!)、「天津彦根」(木ノ紀国造→凡河内<sup>おおしかふち</sup>直、山代直等の祖)、「活津彦根<sup>いくつひこね</sup>」(→?)、そして「熊野櫛樟日<sup>くまのくすび</sup>」(→熊野諸族?→尾張氏本流?)である!

だが、残念ながら、上記のように、まだまだその詳細ははっきりとしない?! とりわけ、その中の「活津彦根命」の後裔氏族がはっきりとしない?! とは言え、彼? (活津彦根命)は、「恩智<sup>おんじ</sup>神社」(八尾市在)の祭神である、「天兒屋<sup>こやね</sup>命」の後裔の「御食津<sup>みけつ</sup>臣命」の妻「御食津比売命」と関係がある?! そして、それが、忍坂と住吉にある「生根<sup>いくね</sup>神社」の祭神(現在は、「少彦名命」等)や「生國魂<sup>いくくにたま</sup>神社」の祭神と同神ともされるらしい(この祭神「生島神<sup>いくしまのかみ</sup>」「足島神<sup>たるしまのかみ</sup>」は、国土の神霊とされ、新天皇の即位儀礼の一つである「八十島祭<sup>やそしままつり</sup>」の際には、主神に祀られる重要な神であった!)?!

ということは、そこに、例の「外宮(伊勢神宮)」の「豊受大神」が絡まっているのかもしれない?! そして、多分それは、「海部氏」(←「倭直<sup>やまとのあたえ</sup>(国造)氏」←「吉備氏/道臣氏?」←「ホアカリ系」?)なのかもしれない?! とにかく、ここで、最も分かりにくいということは、逆に、それだけ、(分からないように)配慮?されているということでもある?!

次に、そこから、(天照大神の)直裔として、「五男神」の長子「天忍穂耳」の子「瓊瓊杵<sup>にぎ</sup>命(天孫)」が降臨することになるわけであるが(ただし、これは、史実?としては、「持統」の子・「草壁皇子」の早世による、孫の「文武ノ軽皇子」の即位を暗示していることは間違いない?)、彼?と「鹿葦津<sup>かしつ</sup>媛」(吾多津<sup>あたつ</sup>姫/木花開耶<sup>このはなのさくや</sup>姫)との子達が、言わば、新たな「三男神」である!

すなわち、長男「火闌降<sup>ほすせり</sup>/火照<sup>ほでり</sup>」(海幸彦→隼人族)、次男「火遠理<sup>ほおり</sup>」(山幸彦・彦火火出見→天孫)、三男「火明<sup>ほあかり</sup>」(饒速日→物部/尾張氏族)ということである(『記』と『紀』では、少し違うが!)?! 要は、最終的には、「ヤマト王権(大和朝廷→百濟系王族政権?)」は、「隼人族(→「住吉大神」?)」と「天皇家」と「饒速日系(「物部族」)」の、三つの種族(氏族)の連携と協力によって成立したという「虚構」が、そこに示されているということである?!

⑰ そこに、「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国?）」の関係が投影されている?!

そこで、これもまた、⑮からの続きとなるが、他ならぬ「天皇家（天孫）」は、件の新たな「三男神」の中の「火遠理<sup>ほおり</sup>」の系統（彦火火出見<sup>ほほでみ</sup>→鵜茅葺不合<sup>うがやふきあえず</sup>→神武／彦火火出見）とされているわけであるが、改めて、何故、そこに「火闌降<sup>ほすせり</sup>／火照<sup>ほでり</sup>」が、天皇家（天孫）／大和王権の構成神とされているのかである?おそらく?最初の勢力（海人族→安曇族・倭国）が、南九州の「隼人族」と協力して、最初の王権（北部九州）を築いた?!そして、その後も、「隼人族」は、なくてはならない種族／勢力であった?!

すなわち、前にも述べたように、「隼人<sup>はやと</sup>／はやひと」とは、船の操舵がうまい、俊敏?→速く漕げる人という意味で、船での移動が主であった当時においては、そうした「海人族・海洋民」の存在は大きいものであった（この場合は、河川／急流航行!）?!そういうことを示しているのではないか?!あるいは、もっと突っ込んで、ひょっとしたら、その後の、「応神」と組んだ「住吉大神（族）」への配慮が、そこにはあったのかもしれない?!

そこで、そのことも視野に入れて、改めて「記紀」の全体構図を捉え直すと、そこには、まさに「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国→日本国?）」の関係が投影されているのではないかという疑念（ある意味単純な理由?）が生じてくるのである?!何故なら、前者の「天智系（筑紫倭国?）→持統・藤原政権」が、後者の「天武系（豊国倭国→日本国?）」を、最終的に駆逐?したのが、その直前の状況であったからである?!

すなわち、701年の「大宝律令」の制定が、その成就（内外への周知）となったのであるが、その「律令」の制定（権を有すること）こそが、その「国家」の国家たる所以（証し）となるということである?!そしてまた、それが、『日本書紀』作成（仕上げ?）の、直接的な動機でもあった?!

ちなみに、『古事記』は、そうした『日本書紀』の作成過程において、書紀のストーリーとは違うものを、すなわち、正統な自家（氏族／勢力）の歴史を伝えるべく（ただし、それも、あくまでも、その自家（氏族／勢力）の言い分として?しかも、表向きは、『書紀』の言い分を肯定しながら?）、おそらく「多氏（太安万侶）」によって準備されたものであろう?!

しかし、それは、かの「天武」によって詔勅されたという「国史編纂」時のものではあったらう?!言わば、それが、「底本」（『原日本紀?』→例の「乙巳の変」の際に、「蘇我蝦夷」邸で焼失したとされる「天皇記」「国記」等か?それらは、かの「蘇我馬子」と「聖徳太子」によるものとされてはいるが?）となっていたということである（もちろん、『日本書紀』も、その『原日本紀?』を底本にしていたことは間違いないであろう?）?!

しかるに、そうした経緯の中で、標記の「天智系（筑紫倭国?）」と「天武系（豊国倭国→日本国?）」の関係は、どのように解明されるのかということになるが、その「証拠」（理由／原因）は、例えば、前者は、「舒明」と「皇極」の子でありながら（そして、長兄でありながらも?）、「皇極」のすぐ後に即位しなかった（出来なかった?）！それは、もう一方の「天武」の存在があったからである（しかも、両者は、実の兄弟とされながらも、互いに自分の娘を複数嫁がせている！天智にあっては4人も！正直言って、こんなことは到底あり得ない!）?!

要は、「天智」と「天武」は、実の兄弟ではなく、しかも、「天武」は、「皇極」の前夫「高向<sup>たかむこ</sup>王」（「用明天皇」の孫）の子の「漢<sup>あや</sup>皇子」の可能性が高く（したがって、天武の方が年上!）、そちらの方の血統が、「（倭→大和の）日本国」の血統としては、正当（正統?）であった?!そう考えられるのである?!

もちろん、これ自体は、実証できるものではないが、その決定的証拠?となるのが、「天智」が、「（大和）飛鳥」から「近江」へと遷都したということ、そして、彼は、そこで、いわゆる「九州（倭国）」の年号（「九州年号」）を使用（発布?）していたということである?!おそらく、彼は、例の「白村江の戦い」の時の倭軍大将?「筑紫君薩野馬<sup>さつやま</sup>」（彼自身は、大王／天皇ではなかったかもしれないが?）の類族であったろう?!要は、彼は、「倭の五王」（具体的には、「百済温祇系余氏」）から続く「筑紫倭国」の一員（皇族）であったということである?!

そして、さらに、その「天智」は、最初「称制」（儀式を経ずに、勝手に名乗ること?）によって「天皇」となったということであるが、それは、上記「薩野馬」が、敗戦責任者として（ということは、彼が、一応「倭国王」?）、「唐」の捕虜になっていた時に（確か5年間?）、その間隙をぬって皇位（「倭国王」?）に就いたとすれば、それ自体は、まさに辻褄が合うことになるわけである（正統性／正当性?は、一応賦与される?）?!

ちなみに、その「（九州）倭国」（本邦では本家となる!）が、600年に、「隋」に遣使した「アメタラシヒコ（阿毎→天氏）」の国であり、少なくとも、その「（九州）倭国」は、701年の「大宝律令」の頃までは存在していたとされるのである!それ故に、かの「天智」は、その「アメタラシヒコ（阿毎→天氏）」の一族、おそらく、その皇位継承権を辛うじて有する人物であったわけである?!

なお、その「（九州）倭国」の先代の王達、すなわち「倭の五王」（讚・珍・濟・興・武）達は、「記紀」では、「近畿倭国→日本国」の「仁徳」「履中」等に振り分けられていると考えられるが（しかし、一対一対応ではない!そうすれば、真実がバレてしまう?否、別の人物を、それに当てている?したがって、その比定自体は出来ない?）、その「（九州）倭国」全体の状況については、かの「武」の宋への「上表文」（誇張やかなりの拡大解釈はあったとしても?）に書かれている

ことを加味すれば（東に、西に、そして半島に進出したこと→版図／「櫛魯<sup>たんろ</sup>」を広げたこと！）、当然？近畿大和も、その版図（「櫛魯」）に入っていたことになる？！

もちろん、それは、いわゆる「東国」も含めてであるが（それが、当時の「(九州)倭国」であった！）、その中の「近畿倭国（日本国）」は、形式的には「(九州)倭国」の一員（「櫛魯国」）であったということである！実は、これが、まさしく「二つの倭国」ということの実態（実体？）であったわけであるが、「記紀」は、当然、その「近畿倭国（日本国）」から、全体の「倭国史」を描いて（ある意味造作して）いるわけである（最終的には、そうなったからではあるが！）？！

ということで、「天智系（筑紫倭国？）」と「天武系（豊国倭国→日本国？）」の関係は、言い換えれば、「(九州)倭国」と「近畿倭国（日本国）」という関係にあり、しかも、「記紀」は、直前の「天武系／「近畿倭国（豊国倭国→日本国？）」を駆逐した（皇位を奪還した？）「天智系」／「(九州／筑紫)倭国」の立場から描かれたものとなっているので、その辺りの史実？の説明（説得？）には、二重の困難？があったということである？！

つまり、一つが、直前の「天武系」／「近畿倭国（豊国倭国→日本国？）」を、ある意味悪逆な手段を使って打倒したことへの後ろめたさ！そして、もう一つが、その後ろめたさ（真実であったので仕方がないが？）を含めて、自らの皇統の正当性／正統性を、真実の「倭国全体の歴史」から示す必要があった？！そういうことである（だから、解釈する我々が苦勞するのでもある？）？！

最後に、ここでは、かなり文脈は異なってくるが、「伊弉諾」と「伊弉冉」の訣別のきっかけをつくった「軻遇突智<sup>かぐつち</sup>（火の神？→これを産んだがために、「伊弉冉」は黄泉の国へ行った→死んだ！）」という神がいるが（確か、全国各地にある「愛宕<sup>あたご</sup>神社」の祭神？）、彼？を、「火の勢力」（火神信仰→手焙形土器（甕/甕<sup>みか</sup>）→前方後方墳勢力）とみると、また、面白い展開（史実？）が見えてくるかもしれない（その「火の勢力」は、「熊野櫛樟日」（→出雲の「熊野大社」）と関係がある？→そして、それは、「初期の出雲」が衰退したことを示すものか？）？！

ちなみに、「出雲の国譲り」（神話）というものは、何も、「天孫族」が、「出雲」の地に乗り込み、そこを占領・支配したということではない（そういう事態も、一時期あったとは言えるが？）！要は、それまで、「出雲（族）」が支配（統治）していた地域（葦原中つ国→プレ倭国→日本国）の支配（統治？）権を、後から来た「天孫族」が譲り受けた（奪った！）という話である！だから、その真実解明の目は、当の出雲地方にだけ向けられてはいけないのである（→稲佐の浜での「タケミカツチ」と「タケミナカタ」との激闘等で、そのように仕向けられてはいるが？）！

⑩ 歴史（「記紀」）を操作した（最初に創った？）のは、「息長氏」と「秦氏」?!

ところで、そうした歴史（「記紀」）編纂に当たっては、『古事記』（ある意味政権を奪われた側の後裔→「多氏」）と『日本書紀』（奪った側の後裔→「藤原氏」／百済系豪族?）の立場が違っている要素（原因）もあるということであるが、もちろん、それらは、まだまだ不分明ではある?!しかしながら、「住吉大神(族)」と組んだ「応神（百済系勢力?）」!そして、彼らによる「瀬戸内海航路」の制圧!そこにまた、「息長氏」や「秦氏」が絡んでいる?!そういうことは言えそうである?!

そこで、ある意味そういうことを前提とすると、件の「記紀」が、我が国の建国史を示している、そして、その大枠自体は事実なのであろうが、そこには、その前史（元話?）、すなわち、そういうことを示している（そこに使用されている）文書や言い伝え等が、先にあった（創られていた?）ということである?!何故なら、そういうもの（ネタ／材料）がなければ、とても古代からの連綿たる歴史は書けないからである?!ましてや、「新参者?」であれば、なおさらである（藤原氏、あるいは百済系王族は、一番後に渡来してきた氏族・勢力である?!）!

したがって、別な意味で、問題は、その元となる話?を、誰が創作（起草?）したのかということになり、今、俄かに思い始めていることは、多分?それは、「息長氏」や「秦氏」であり、「記紀」の事績・逸話は、それらの合作（取捨選択?）によってなされたのではないかということである?!つまり、「息長氏」（かの「神功皇后」や「継体天皇」とつながる!）と、「ある時」から、彼らと、言わば「一心同体?」となった「秦氏」の関わりが、そこにあるのではないかということである（特に、「天孫降臨」の構想は、彼らが編み出した?）?!

しかも、今、改めて痛感することは、その「秦氏」は、想像以上に影響力（財力に物を言わせ?）をもっていたということである（645年の「乙巳の変」の実行犯?であった可能性も含めて?）?!具体的には、数多くの事績、例えば神社創建（京都の賀茂大社：上賀茂神社／下鴨神社、伏見稻荷大社等）、仏教への影響（広隆寺、修験道／役小角）、そして、それらに関わる経済・文化面での活躍・貢献ということである（しかも、そこにユダヤ系要素の導入?も見られる→神社様式）?!

だからこそ、そのことは、例の「高天原神話」に対するこだわり（自負?）にもつながっている?!どういうことかと言うと、そこには、「秦氏」の伝承が重要な役割を担っているということであるが、それがあからこそ、例えば「宇佐神宮（「八幡大神」←「応神」?）」を巡る、「大神<sub>おおが</sub>氏（→「高千穂氏」）」と「秦氏（→惟宗<sub>これむね</sub>氏）→辛島<sub>からしま</sub>氏（→島津氏）」の、「天降り神話（天孫降臨）」の本家?争いも出来たのである?!

すなわち、そこには、後者の、前者に対する意地（正統意識?）もあつたということであるが、具体的には、宇佐（八幡宮）から大隅に移住させられた（「隼

人」鎮圧のため?) 彼らは、自ら創祀した「鹿児島神宮」を「正八幡宮」と名乗り、自ら(秦氏→惟宗氏)が、「宇佐神宮」の正統な祭祀者、そして、「天孫降臨神話」の生みの親? だということを、世に知らしめたということである?! だから、例の「二つの高千穂(天孫降臨地? →宮崎県高千穂地方と霧島山系高千穂の峰)」の存在(謎?)については、そこに原因があるということである(以前にも述べたように、このことは、ある意味大発見かもしれない?)!

ところで、最初の、その「ある時」ということは、まだまだよく分らないのであるが(ひょっとしたら永遠に分らない?)、それぞれの成立年代(古事記: 712年/日本書紀: 720年)の、少し前(or それなりに前?) であることは言うまでもない?! その事実(雰囲気)を示すのが、例の第40代「天武天皇」の時代であろうが(国史編纂の動き→「削偽定実」)、その材料(ネタ)となったものは、当然、各地・各様にあった、しかも集められた? 「文書」や「言い伝え」であったことは言うまでもない!

ただし、問題は、その材料(ネタ)となったものを、誰(どんな勢力)が、どのようにつなぎ合わせ、まさに編纂(ある意味創作?) したのかということであるが、当然ながら、その違いによって、同じ歴史であっても、様相はかなり違って来るわけである! それ故に、『古事記』は、「推古朝」までを書けばよかつたのである(そこまでで、自分達の言い分は、書き尽くせているから?) ?!

もちろん、最終的には(特に『日本書紀』は!)、時の「覇権勢力」であった「(百済系)持統・藤原体制」が、その完結形を狙ったわけではある(その後も、加除修正の連続ではあった? →「桓武」の時に完遂?) ?! 多分、そのことは事実であろうが、別の問題は、それに協力・加担した、あるいは具体的な記事内容の材料(ネタ)を提供した氏族・勢力が、一方であったであろうことである?! それ、「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂(直)氏」であったということである?!

すなわち、「持統・藤原政権」は、最終的な勝利者? ではあったが、その実績は浅く(しかも、あまり誇れない?)、事実としては、まさに「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂(直)氏」等の協力(参画?) によって、それまでの歴史が創られてきたということでもある?! 言い換えれば、彼らは、ある意味勝者側の氏族・勢力であったということである?!

しかしながら、もちろん、そこには、一方で、敗者側の氏族・勢力もいたわけである! 「蘇我氏」「物部氏」「尾張氏」等がそれであるが(むしろこちらが正当・正統?)、もし、そうであれば、当然「記紀」の読み(解釈)は、こうした解釈の下で深められなければいけないということになる?!

例えば、「記紀」に先行した『天皇記』『国記』(620年、「推古天皇」の命によって、厩戸<sup>うまやど</sup>皇子/聖徳太子? が、蘇我馬子と一緒につくったとされる?) であるが、『日本書紀』は、蘇我蝦夷の家にあった両書は、645年の蘇我本宗家の

滅亡の際に焼失したとするが、船史恵尺(ふねのふひとえさか)が、その中の『国記』の一部？を取り出し、中大兄皇子／天智に差し出したとしている?!だが、その話は、限りなく怪しい?!

ただ、いずれにしても、「神話」の世界でいう「高天原＝天上」（「天津神／天神・天孫族」）は、当然？前者の「中臣氏」「息長氏」「秦氏」「賀茂（直）氏」等の勢力関係（あるいは出発地／居住地？）を指しており、「葦原中つ国＝地上」（「国津神／地祇族」）は、「蘇我氏」「物部氏」「尾張氏」等の勢力関係（あるいは出発地／居住地？）ということになるわけでもある?!しかし、そこに、「天照大神」と「素戔鳴命」の関係が、複雑に絡まっていることは言うまでもない（何故なら、「素戔鳴命（系）」も、一応「天津神」ではあったわけである!）?!

もちろん、そういうことではあるが、そこに、例の「陰陽思想」、あるいは「善と悪」の二元論的歴史観（←拝火教／ゾロアスター教?）による、自らの建国史の樹立という構想図が、そこに埋め込まれているわけでもある?!また、よく、「日ユ同祖論」とか、「イスラエルの消えた 12 支族の謎」とかということで、我が国の建国における「ユダヤの要素」が指摘されるが、どうもこれは、決して一笑に付せない? 真実のような感もある?!

つまり、シュメール（人）やユダヤ（人）の匂い? や痕跡（神社の鳥居や山伏のいで立ち、菊の御紋、聖徳太子像 等々。また、千葉県芝山町にある「はにわ博物館」には、そのユダヤ人と目される「人形埴輪」もあるらしい!）のことであるが、例えば、「阿曇氏」の祖神は「海神」とされているが、その「安曇氏」が、どうも、そのユダヤの要素をもつ「秦氏」と繋がっていた?!その証拠?として、「対馬」の「海神わたつみ神社」（綿津見神＝阿曇氏の宮）の祭神は、もとは「八幡神」であったとされるが、その八幡神は、「秦氏」が奉斎する神であるから、「綿津見神」が、「秦氏」と関わりがある?!

そしてまた、その「綿津見神」の子が「宇都志日金拆うつしひがなさく命」（意味は、「ユダヤ系の神で、鏡を割る風習をもつ神」とされる?）であるので、割れた（割られた）鏡が、伊都国の王墓から出土するということであるが、後の『新撰姓氏録』では、「安曇連」は、「綿積神命」の児「穂高見ほたかみ命」の子孫で（『古事記』では、綿津見命の子「宇都志日金拆命」の子孫とある）、そうなれば、「穂高見命」は「宇都志日金拆命」ともなる?!

よって、勾玉・（割られた）鏡・剣（の三種の神器?）がセットで出土する怡土いと郡の諸遺跡は、「宇都志＝ユダヤの」＋「日金拆＝鏡を割る」風習をもつユダヤ系伊都国の王墓であったということになるわけである?!なお、その伊都の地には、「波多（秦?）江」（秦の港?）という地名が残っている! 「波多氏」は、「弓月君」一行（秦氏の本隊?）より早く渡来していたが、彼らも、秦氏族であった（ちなみに、波多氏は、かの「武内宿禰」系の一氏族となっている!）?!

⑨ それを、集大成（改竄／剽窃？）したのが「藤原氏（不平等）」？！

ということで、改めて「歴史」の解明と言うことで言えば、その「記紀」に示されていることは、史実？のかなりの反映であることは間違いなく（捏造も含めて！）、しかも、「神話」は、誰か（どこかの勢力）が、そうしたことを、意図的、暗喩的に示しているということである（換骨奪胎的とも言えるが？）？！

もちろん、そうした理解をすることは、かなりの英断であり、これまでの通説や、それに基づく「天皇家への敬慕」を蔑ろにする恐れもあるが、史実を知るといふことと、その話（「記紀」）の作成意義を解明するといふことは、まったく次元の異なる話ということである！

ちなみに、最も要となっている「応神」（事実上は、それに仮構されている人物！）については、その実在の確かさは、多くの人が認めるところであるが、古墳時代のある時期に、まずは北部九州に渡来し、その後、近畿・河内に移動した人物（勢力）ではないかと考えられている（「河内王朝」とも呼ばれているが、いわゆる騎馬民族的な文化や生活様式をもった扶余系、あるいはその同系とされる高句麗・百済系？）？！

したがって、それが本当ならば、後の「継体」や「欽明」、あるいは「天智」や「天武」等は、すべてその子孫ということになり、日本の皇室は、まさに、そこに淵源があるということになる？！だが、いずれにしても、そうなると、当時の記紀編纂者達が目指していた、「天照大神」から連綿と続く「万世一系」の皇統譜づくり（の嘘！）が、そこで（も？）見破られてしまう？！多分そこで、彼らは、他ならぬ「応神」の系譜づくりに、大いに腐心したことになる？！

しかも、一方で、それに関わって、「記紀」には、もう一つ、どうしても書き記さなければならないことがあった？！それは、皇統譜の本源とも言える？「倭国・邪馬台国」あるいは、そこにおける女王「卑弥呼」や「台与」の存在である。繰り返しになるが、そのことは、その当時の宗主国（中国）の「魏志倭人伝」に厳然と書かれているからであり、それを黙殺することは出来なかった？！つまり、彼女らが直接の先祖ではなかったがために、やむなく、邪馬台国や女王の存在を、遠回しに匂わせることにはしたということである？！

実は、ここからが、私の閃き（妄想？）なのであるが、この時同時に、「応神」の虚像（すり替わり？）が必要となってきたということである？！何故なら、「応神」は、そこで遠回しに匂わせられた卑弥呼ないし台与（→神功皇后）と、その夫仲哀（本当は、住吉大神?!）の子として、その出自が示されていたからである！ということとは、実際の女王（多分台与!）と誰かの子として、「応神」に成り代わる人物を、新たに創出しなければならなかった？！それが、他ならぬ「神武」ではなかったかということである？！

そして、それこそ荒唐無稽な話となるかもしれないが、卑弥呼・台与の時代

を神話にし、もう一つのカラクリとしての「アマテラス」と「スサノオ」の関係を創出し、彼（創出された神武！）を、彼女らの末裔（神裔）とした?!つまり、本当の3世紀前後において、アマテラス（卑弥呼・台与）の系統に、応神（→神武←渡来系百済?）の系譜をつなぎ入れ、一方のスサノオ系（これが真の皇統系譜=出雲系?）との一体化（融合）を図ったということである?!

けれども、それ自体は、ある意味では事実なのであり、その関係は、「神功皇后」と「住吉大神」の関係に昇華されたが、実はそれは、卑弥呼・台与（多分台与!）の「邪馬台国」と「出雲」の関係を示すものでもあった?!ここでは、卑弥呼・台与との対であるスサノオ・オオクニヌシが、実際に誰であったのかは特定できないが、「神武」を、それらの人物との間の子としたのである?!

しかし、実際の神武（応神の虚像ではない、実在した人物!）は、まさしく九州南部?から近畿・大和に移動（移住?）していた人物であり、だからこそ、その人物（実際の神武）の先祖としての、いわゆる「日向三代」の天孫降臨の地も、そこにしたのである?!

ということで、まずは「応神」に目をつけ、「神武」と、そのすり替わりのモデル「カモタケツヌミ」の関係（カラクリ?）を炙り出し、その関係から、「神功皇后」こと「息長足姫」と「天日矛（ツヌガアラシト?!）」の関係、そしてまた、その「天日矛（ツヌガアラシト?!）」と「事代主」や「住吉大神」、さらには「武内宿禰」との関係、そして最後には、百済（残国）王（兄王）こと「讚（藤?）」と「仁徳」の関係にまで、その類推（推理?）の幅（連鎖?）を広げる必要が出て来るのである?!

ただし、そうは言っても、「記紀」の最終作成者（黒幕?）は、「藤原氏（不比等）」である?!要は、とにかく藤原氏（不比等）は、自らの政権の正当性・正統性を、何としてでも示したかった!それが、『日本書紀』編纂（集大成←改竄／剽窃?）の目的でもあった!そして、それは、直接的には、「天武（系）」の正当性・正統性を、「天智（系）」の正当性・正統性に置き換えることであった!何故なら、それは、事実であったからであるが（「天智」は、まがりなりにも?九州倭国の継承者ではあった!）、そのプロセスが、あくどいものでもあった?!

そこで、彼らが採用した、「記紀」（直接には『日本書紀』）の編纂方針は、以下のようなものであった?!

### 1. 「国史」をもち、しかも長い歴史を有する国とする。

まずは、いわゆる「国史」をもち、しかも出来るだけ長い歴史を有する国とする。何故、そのようなことをしたのか?それは、国史（正史）の保有、しかもその長い歴史の存在は、政権（皇統）の正当性・正統性を保証するとされたからである。そのために、神話を創作し、はるか縄文時代?に遡って、当時の皇室の起源を設けた!そこに、いわゆる辛酉革命（1260年単位の、天命による

体制変革)の思想が導入された?!

## 2. いわゆる「大和王権」の創始者は、九州から来たとする。

次に、「大和王権」の創始者(「神武」)は、九州から来たとする。だが、その「神武の東征」と、その前に降臨したとされる「ニギハヤヒ」との関係をどう説明するかが、もう一つの重要な点であった?!これについては、もともと彼らの祖先が、そこ(大和)にいたのであれば、わざわざ「天孫降臨神話」を設けて、九州の高千穂というような僻地?を選ぶ必要はなかった?つまり、大和のどこかでもよかったわけである!

だが、そのようにはしなかった! 事實は、九州からの渡来であったからであるが、一方で、それまでの盟主的存在であった「出雲」勢力(本来の皇統?)の存在を仄めかしながら、それを、神話としてデフォルメさせ、その関係を明示しなかった?!

## 3. 天照大神を創出(捏造?)し、そこから続く、万世一系の天皇中心国家であるとする。

次が、「天照大神」を創出(捏造?)し、そこから続く、万世一系の天皇中心国家とするということであった。そこで問われるのが、そもそも神武元年(BC660年)を、何故、「推古」期(そこにも「辛酉」年あり!)から起算したかであるが、それは、彼女を最初の「女帝」とし、後の「持統」女帝の正当性・正統性を、その虚偽の作為から主張する意図があった?!そして、そこから、いわゆる「万世一系」の皇統譜を創り上げた?!

そこに、天武後の持統を天照大神に見立て、現政権の正統性・正当性を、その天照大神から賦与されているという虚構を創りたかったからであるが、他に例はない? 諡号の変更(大日本根子広野姫→高天原広野姫)は、そのことを如実に示している?!しかも、ここがミソ?であるが、それも含めて、夫の天武の系統が続いたように見せかけて、実は、父親の天智の系統に切り替えた、さらには、この持統女帝の登場によって、全く新たな王朝が始まったことを示した?!それが、神々の体系、天照大神の位置づけ等に反映されているわけである?!

## 4. 神話に、関係の氏族・人物等を投影させ、それらの関係あるいは正当性・正統性等を賦与する。

最後が、現政権(藤原氏)は、確かな後ろめたさがあつて、自家あるいは氏族・勢力関係の推移を、年代や史実を変えたり、入れ替えたり、あるいは外交等の文献等から移植したりしながら、自家及び友好関係にある氏族・勢力に一定の配慮をしながら示した?!つまり、彼らは、篡奪(乗っ取り?)者あるいは傍流であったということであり、したがって、できるだけ真実を隠し、ごまかし、偽造しようとしたということである!そして、それを、神話(神代)の形にしたということである?!

## ⑳ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか？－その１－

最後に、ここでの「まとめ的なもの」ということになるが、記紀編纂者（勝利者？）側の「持統・藤原政権（藤原不比等）」の大きな作為は、自らが担いだ「持統」の「天照大神」への昇華と、父祖「鎌足」の顕彰（「中臣氏」の祖神「天児屋命」への昇華）、そして、その父祖ないしは本人の「高皇産霊神 or 思兼神」への昇華ということであった?! しかも、旧政権（天武王統）が続いたと見せて、その王統からの離脱（新王統の創出→天照大神／持統から続く「新王統」）を表出させていた?! したがって、その最大の注力は、それを、古代から続く「万世一系」の皇統譜として、いかに創り上げて（繋げて？）いくかであった?!

しかしながら、これも繰り返しになるが、その作為の最大のネック（弱点）は、先の「天武政権」、そしてまた、その基盤である「物部・蘇我政権（王朝?）」を、どのように位置づける（表現する）かであった?! 何故なら、真実は、彼らを潰して? つくりあげたものでもあったからである?!

そこで、まずはそうした虚偽・造作の中で、全体としては、現在の政権（藤原政権!）を正統・正当化するような内容とし、それまでに実在した邪馬台国あるいは倭国全体の実態（実体?）、さらには出雲の先在、そして、それらと「倭国→日本国」の関係や各関係氏族（韓半島・渡来人を含む）との相克を可能な限り暈し、最終的には、蘇我氏・物部氏・尾張氏等を抹殺する一方で、至るところで、編纂当時の氏族・人物（の先祖等）が、どのようにそれに貢献したのかを暗示（賦与?）させるように、次のような、神話のストーリーを考案し、それを投影させたのでもある?!

すなわち、高天原での神生み・国生み（伊弉諾・伊弉冉等）／三貴子誕生（アマテラス・ツクヨミ・スサノオ）／アマテラスとスサノオの誓約（ウケヒ）／スサノオの狼藉とアマテラスの天の岩戸隠れ／スサノオの追放・出雲降臨・八岐大蛇退治／出雲の大国主の活躍と国譲り、最後が、天孫降臨（ニニギ）、日向三代（「海幸・山幸物語」等）、そして、神武東征ということである!

ちなみに、最後の、天孫降臨（ニニギ）はともかく、その先の「日向三代（「海幸・山幸物語」等）」の話は、人皇初代の「神武」へとつなぐ皇祖神の話であるが、もちろんそうした事実はなく（BC660年以前の話となるので当然ではあるが!）、それらを、より古くみせるためのフェイク話であることは間違いない?!

ただし、そのモチーフ（題材）は、当然あるわけであり、それは、「記紀」に示された古代史の大きな枠組み、すなわち「皇孫（ニニギ→天皇家）」が出会った（通婚あるいは共闘した）氏族・勢力との関係を、ある意味史実に即して表したものであろう?! それが、まずは「山祇やまつみ族」（→アタツ or アヒラツヒメ／コノハナサクヤヒメ／三島族＋隼人族?）、次が、「海神わたつみ族」（→トヨタマヒメ／ワニ族）、そして最後が、同じ「海神族」ではあるが、「カモ族」（→タマヨ

リヒメ)ということであった?!そう捉えると、実は、それ自体(元の話)は、かの「海神=ワタツミ=安曇族」との話ということにもなる?!

そこで、以上を踏まえて、改めて、「ヤマト建国」の真実はどうなっていたのか?であるが、まずは、2世紀末から3世紀初頭にかけて、奈良盆地の南東の三輪山麓の扇状地に、政治と宗教に特化された巨大都市が出現した。それが「纏向(遺跡)」であるが、その後、3世紀後半から4世紀にかけて、そこで出現(成就?)した「前方後円墳体制」が完成し、その埋葬形態が、各地に伝播していった!

一方で、そうした動きを誘った、北部九州の「倭国大乱」後の3世紀の前半頃、北部九州では、「伊都国」と組んだ?件の「邪馬台国」が台頭してきて、それまでの、「奴国」中心の倭国をまとめ上げていった(女王卑弥呼の共立!)?!そして、その「邪馬台国」は魏に遣使し、「親魏倭王」の称号も貰った!南に隣接する「狗奴国」との争いは絶えなかったものの、当分の間は、安泰だった?!

問題は、そこでの「出雲」との関係であるが(間違いなく?出雲勢力は北/東南部九州にも顔を出している?!←日田の「小迫辻原遺跡」!)、同じ3世紀の前半頃、先述のように、近畿大和に、突如として大規模な「祭政都市(纏向)」が出現する。ここを主導したのが、いわゆる吉備勢力(賀茂/和珥+物部族?)であり、彼らは、近江・東海・関東(→和珥氏、尾張氏等)、さらにまた丹波・丹後地方にまで、その版図を広げていった?!だが、そこでややこしいのは、彼らと、その出雲勢力との関係であり、さらにまた、「神武東征」にみる、南部九州勢力(曾於/日向→カモ族?)との関係なのである?!

いずれにしても、以上から言えることは、倭国→日本国の建国期においては、北部九州を中心とする倭国→邪馬台国連合の推移の中で、ある時から(ほとんど同時期?)吉備から出た?近畿・大和の勢力が、出雲や南部九州の勢力と手を結び、その後、北部九州との離反・融合を繰り返しながら、最終的には近畿大和の地で、まさに統一国家「日本国<sub>ヤマト</sub>」が創り上げられたということである(ただし、これらは、記紀には直接には示されていない!やはり、そこには、絶対に明らかにできないことがあったということである!)?!

そこで、改めて浮上するのが、卑弥呼やトヨ(壱與 or 臺與)のことであるが(神話には、卑弥呼または卑弥呼+トヨが天照大神に投影されている?!)、二人の素性・関係性が、改めて問われる(「魏志」では、「トヨ」は13歳の「宗女」とされているが、実はこれが、『日本書紀』では、「神功皇后」に投影されている?!)?!それに関わっては、「彦火明<sub>ヒコホアカリ</sub>命」ないしは「ニギハヤヒ」系統の、尾張氏・海部氏等の存在・関係性がある(特に、「海部氏」?)?!

すなわち、そこに、「初期ヤマト建国」ということが関わってくるが、その首都?「纏向」には、各地から大量の土器(外来系土器)が流れ込んでいた(内

訳は、東海 49%、山陰・北陸 17%、河内 10%、吉備 7%、関東 5%、近江 5%、西部瀬戸内 3%、播磨 3%、紀伊 1%、※北部九州系は、ごく僅か！)。しかも、墳墓自体も、各地（勢力）の寄せ集めだった？！

具体的には、前方後円墳の「葺石」は、山陰地方の「四隅突出型墳丘墓」の「貼石」、墳丘上に並べた「特殊器台形土器／特殊壺形土器」は「吉備」、「濠」は、近畿地方の「方形周溝墓」の「周溝」が発展したものの、豪華な副葬品は、「北部九州」からの影響（本当は、ここが重要？）、そういうことである（ちなみに、その纏向遺跡を代表する前方後円墳である「箸中（箸中山）古墳」は、3世紀半ば（→4世紀？）の造営とされている?!被葬者は、「吉備」からの？「倭迹迹日百襲姫命ヤマトトトビモモノヒメ」とされる？）?!

参考までに、その「倭迹迹日百襲姫命」／「前方後円墳」は「吉備」勢力で、初期ヤマト王権のシンボル、「前方後方墳」は「出雲」、あるいは「近江・東海」勢力（→尾張氏、息長氏等）のシンボル、といった具合であろうか?!ちなみに、前者は、前にも述べたように、「吉備」の「楯築墳丘墓（双方中円墳）」が原型であった！ただし、その基本は、多分「円墳」であろう?!

ということで、「円墳」が吉備（→物部氏?）、「方墳」が出雲（→蘇我氏）ということにもなっていくようであるが、それと、同じ山陰・出雲で盛行した「四隅突出型墳丘墓（方墳?）」がどうつながるのか？そしてまた、「前方後円墳」は、7世紀前半の「物部氏」の没落とともに、消滅していくというようにもあるが、それは、単なる偶然なのか？あるいは大いに関係があるのか？

もし、関係があるのならば、「前方後円墳」の出現は、まさに「物部氏」と直接つながっており（「物部氏」主導・中心で、その墳墓は出来上がったもの?!）、墳墓自体は、一番「吉備」の要素が強いとされているので（「高坏」「特殊器台」<→埴輪>等）、その物部氏は、「吉備」（そこもある時期からのものであり、それ以前に彼らは、どこからかやって来た?!）の出だということにもなる?!

そうなると、少なくとも初期ヤマト王権は、「吉備」（物部氏?）を中心として、出雲（→蘇我氏）、尾張氏等によって樹立されたのではないのか！いわゆる「大和三山」と言われるものがあるが、「畝傍山」…蘇我氏（出雲系）・男性・八尺瓊勾玉（忌部氏?）／「耳成山」…物部氏・女性・八咫鏡（石凝姥いしこりどめ命?）／「(天)香久山」…尾張氏・女性・草薙剣、というような関連付けもある?!これらは、この氏族達が、初期ヤマト王権を構成していたことを示すものと思われるが、だとしたら、何とも象徴的な三山構成ではないか?!

とにかく、こうした動きが、近畿大和を中心に創られていったことは事実であり、一方で、例の「魏志倭人伝」に示されている「倭国／邪馬台国」の状況と、それらが、どのような関係にあったのかということが、間違いなく？我が国古代史解明の最大の課題であることは言うまでもないのである！

## ⑫ 改めて、「ヤマト建国」の真実は、どうなっていたのか？－その２－

そこで、もちろん、その両者が連続しているものとするのが「邪馬台国（→倭国→日本国）近畿大和説」であり、一方で、近畿大和のそのことは認めながらも、あくまでも「倭国／邪馬台国」自体は「九州（北部九州）」にあり、その後裔国（本家筋？）が、少なくとも8世紀初頭までは存続したとするのが「邪馬台国（→倭国）九州説」なのである！

ちなみに、私自身は、後者の「邪馬台国（→倭国）九州説」を支持するものであるが、いずれにしても、その双方？の状況は、いわゆる2世紀後半の「倭国大乱」（180年前後に収束？）によって出来たことは間違いないであろう?!まさに、その「倭国大乱」が、その後の倭国全体のあり様を大きく決定したということであるが、その「邪馬台国所在地論争」が、この「倭国大乱」の実相によって、大きく規定されてくることは言うまでもないのである?!

何故なら、単なる所在地論争だけでは話にならないからである（そこに、状況出現の因果関係やその実態の解明が加わらないと、本当の真実究明には至れないということである!）!しかも、その「状況出現の因果関係やその実態の解明」は、これまでのところ、多くの人々の恣意（信念?否、学派?付度?）も手伝って、なかなか一筋縄ではいかなかったのである?!

ということで、以下、一応の史実解明材料（大方の同意が得られているもの）を活用して、ここで言う「状況出現の因果関係やその実態」を、改めて、より鮮明に炙り出していきたいのであるが、まずは、その「纏向（遺跡）」の状況から、話は組み立てられていかねなければならない?!何故なら、そこが、各地からの部族・勢力の結集（寄せ集め?）の場所であったからである!

つまり、問題は、何故、その時期に、そうした部族・勢力が、その地に集まったのかということであるが、それが、ここで言う「史実」の解明の鍵となると考えられるからである?!もちろん、これについては、立地の良さ（天然の要害?）が考えられるが、逆に、船での輸送・移動が一般的であった古代に、あのような奥深い内陸部（盆地）に、何故、人々が寄り集まる必要があったのか?しかも、言わば「全国各地」から!そこが、謎と言えれば謎なのである!

であれば、そこには、別の、ある特別な理由（結集の原因?）があったはずである（ただし、それは、結果的にそうなったのではあろうか?）!それは、第一に、そうすることによって、自ら（の部族・勢力）の生活の安定（保障?）、利益が得られる?!しかも、それは、それまでの北部九州の優位（とりわけ「鉄」の保有）から脱却出来る（もちろん、追い出された／締め出された悔しさや怨念もあった?）?!だから、一致団結して頑張ろう!そういうことではなかったか?!

すなわち、それは、最初は「稲作」であったろうし（奈良盆地は、当時は「湖」、または大半が「湿地帯」であり、したがって、その周囲を、人々は、「農耕」のため

に拓殖した→環濠集落→「唐古・鍵遺跡」)、次は(並行して?)、おそらく「鉦山関係」の人々が集まってきたのであろう(朱/丹生あるいは銅を求めて!)?!現に、盆地東南部及び反対側の伊勢湾内陸部(「中央構造線」沿い)には、朱/丹生あるいは銅を産出する大規模な「熱鉦床群」があり、朱/丹生や銅等の採掘が、盛んに行われていたようである(ちなみに、「伊勢」の重要性も、ここから垣間見られる?)?!

そして、ここが重要であるが、人々は、それぞれ大きな河川を利用して、その土地々を開拓・占有し、それぞれの流域に根拠地を形成した(だから、彼らは、基本的には「海洋民(海人族)」であった?)?!ちなみに、その河川、しかも大動脈となった大きな河川系とは、「淀川・木津川水系」、「大和川水系」、「紀ノ川水系」といったところである!ただし、いずれにしても、その土地々には、当然?在来(縄文系?)の人々が先住していたことではあろう?!

以上、言わば「全国各地」から人々が集住してきたことは、このような理由から説明できるのであるが、問題は、改めて、何故(直接のきっかけ?)、その時期(から?)、かの「三輪山山麓(纏向)」に巨大な祭政都市(太陽信仰/龍蛇神信仰?)が出現したのかである!これについては、前にも述べたように、「吉備」の勢力の進出が指摘されるのであるが、全体構図としては、彼らが、上記の各地の部族・勢力に呼びかけて、大きな勢力(王権?)を形づくっていたということである(しかも、「出雲」勢力を抱き込んで?否、同化して?)?!

もしそうであるとしたら、何故、「吉備(及び出雲)」勢力は、近畿(大和)に移動し、そして、それに呼応して、河内、近江、丹波、東海、北陸、山陰といった地域の諸部族・勢力が、その大和の地に集結したのかということが、残された?大いなる謎として浮かび上がってくる?!その大きな原因(背景)として考えられるのが、まさに「鉄(器)」の保有に関わる問題であったということである?!

ということで、もちろん、そのような原因(背景)は、詳細においては、多々異同もあるとは思われるが、少なくとも「邪馬台国所在地論争」には、そうした原因(背景)、及びその構図の解明に、まさに正面から立ち向かわなければならぬのではないのか!

要は、それは、いわゆる「北部九州説」には、直接の課題とはならないが(当然、間接的には関係はある!「東遷論」も、その一つである!)、一方の「近畿大和説」においては、そのことの、極めて整合的な解釈が必要不可欠となってくるということである!何故なら、(そこで言われる)「邪馬台国」は、決して所与の(最初からそこにあった)国ではないからである(もちろん、別の文脈では、「北部九州説」においても然りではあるが?)!

何故、そこだけ?あるいは、何故、そこからしか見ない(述べない)のか?

これまでの「邪馬台国所在地論争」には、そうした不満（疑問？）が残っていたわけであるが（特に、「畿内説」に？）、それを、何とかして超克していかなければいけないのである？！

であれば、ここでは、近畿・大和（「邪馬台国」ではない！）の状況（移り変わり）と、一方の北部九州（「邪馬台国（連合）」）の状況（移り変わり）が、例の「倭国大乱」と、どのような関係にあったのかということが、改めてクローズアップされてくるということは言うまでもない！何故なら、少なくとも、その出現は、双方共に、まさに、その「倭国大乱」によってもたらされたものと言えるからである？！

ちなみに、纏向遺跡等の「豪華な副葬品（→三種の神器？）」は北部九州の影響があったと考えられ、しかも、両者の関係（要素）は、それ以外にも、いたるところで見出されるのである（地域、氏族名等の一致等も含めて！）！したがって、その「倭国大乱」が、その後の「二つの倭国」を形成していったことは明白な事実であり、それらが、「記紀神話（神生み・国生み／誓約／国譲り／天孫降臨 等）」に昇華されてもいるとも考えられるのである？！

とにかく、多少堂々巡りとはなっているが、次なる課題は、改めて、以上のような移り変わり（状況出現の因果関係）を、一体どのように解明するかということになるが（単なる「東遷論」では説明できない？）、であるならば、その「倭国大乱」というものが、どういうものであったのか？ということが、改めてここでは問われてくる？！そして、ここで俄然注目されるのが、例の藤井耕一郎氏の論究なのである！

すなわち、その大乱は、吉備の「太陽／龍蛇信仰族（江南系部族？大物主／鴨族？）」がもたらしたというものであるが、彼らの移動／進出、すなわち当該部族・勢力の、東西に亘る（出雲を経由した？）集散離合のプロセスが、その大乱の顛末であったということである？！

ただし、それ自体は、よく考えてみると、「吉備」からのものではあったが、その先の原因（背景）は、実は、2世紀末の「倭国大乱」（北部九州）と考えられ、そこにおける「奴国」「伊都国」の変容（王族達の東への移動／逃亡？）、そして、近畿／出雲からの「多氏（神八井耳）」勢力の進出（出戻り？）によって、その様相は大きく変わっていった（かの「邪馬台国」も、まさにその文脈から？もちろん、そこには、後の「崇神」「応神」や「倭の五王」も大いに関わってくる？）？！

末尾に、こうした動き／変貌は、いわゆる「渡来系」の倭人（「海神」「山祇」→「江南系」「伽耶・新羅系」「百濟系」の三つに分けられる？）によって惹き起こされたものと言えるが、それ故に、この史実解明にあたっては、その渡来系の人々の、元居た国や土地のことも絡めて考察していかなければならない？！要するに、我が国内だけの枠組み・視点で見えてはいけないということである！